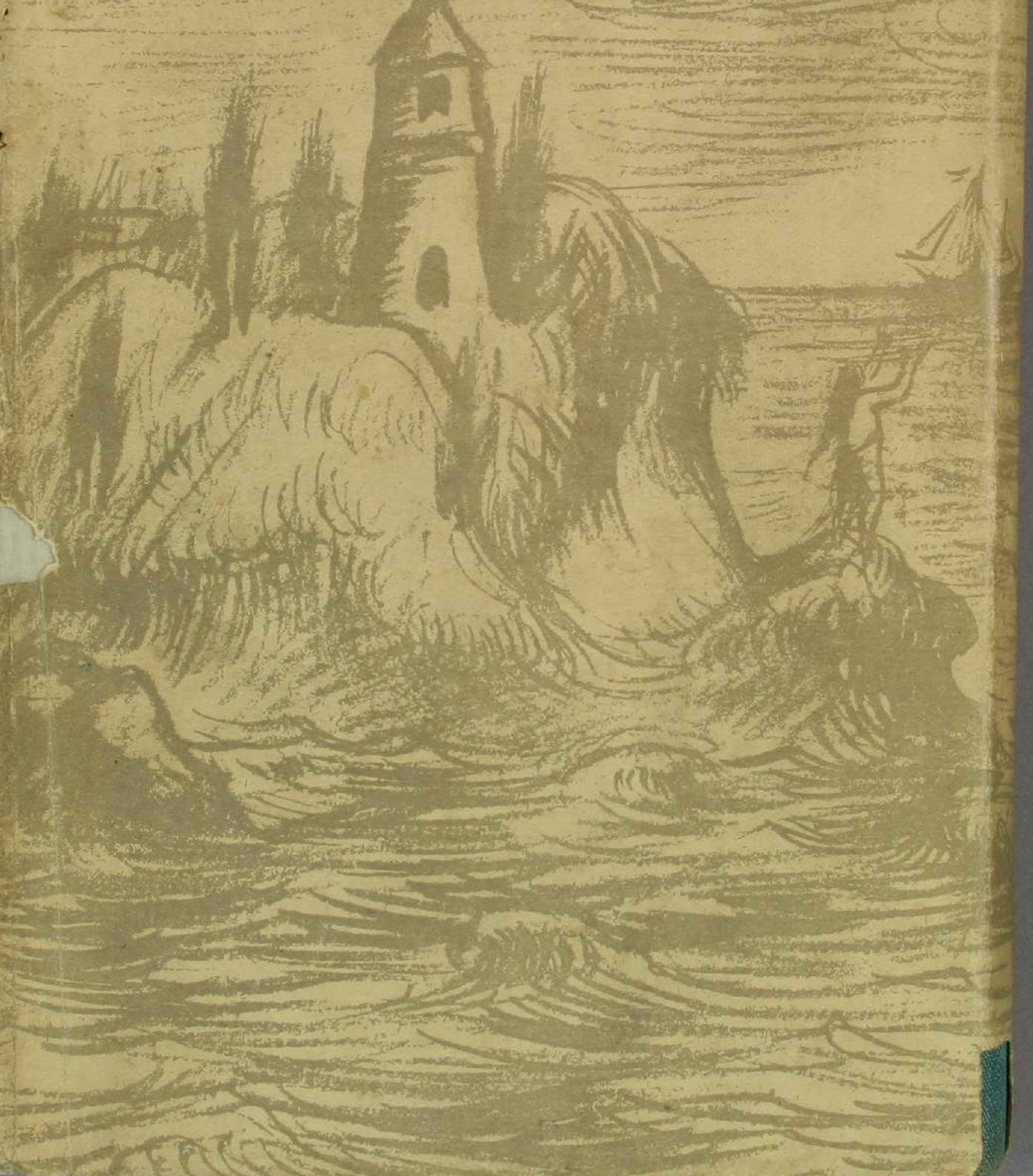
幻想詩劇

死の島の美女



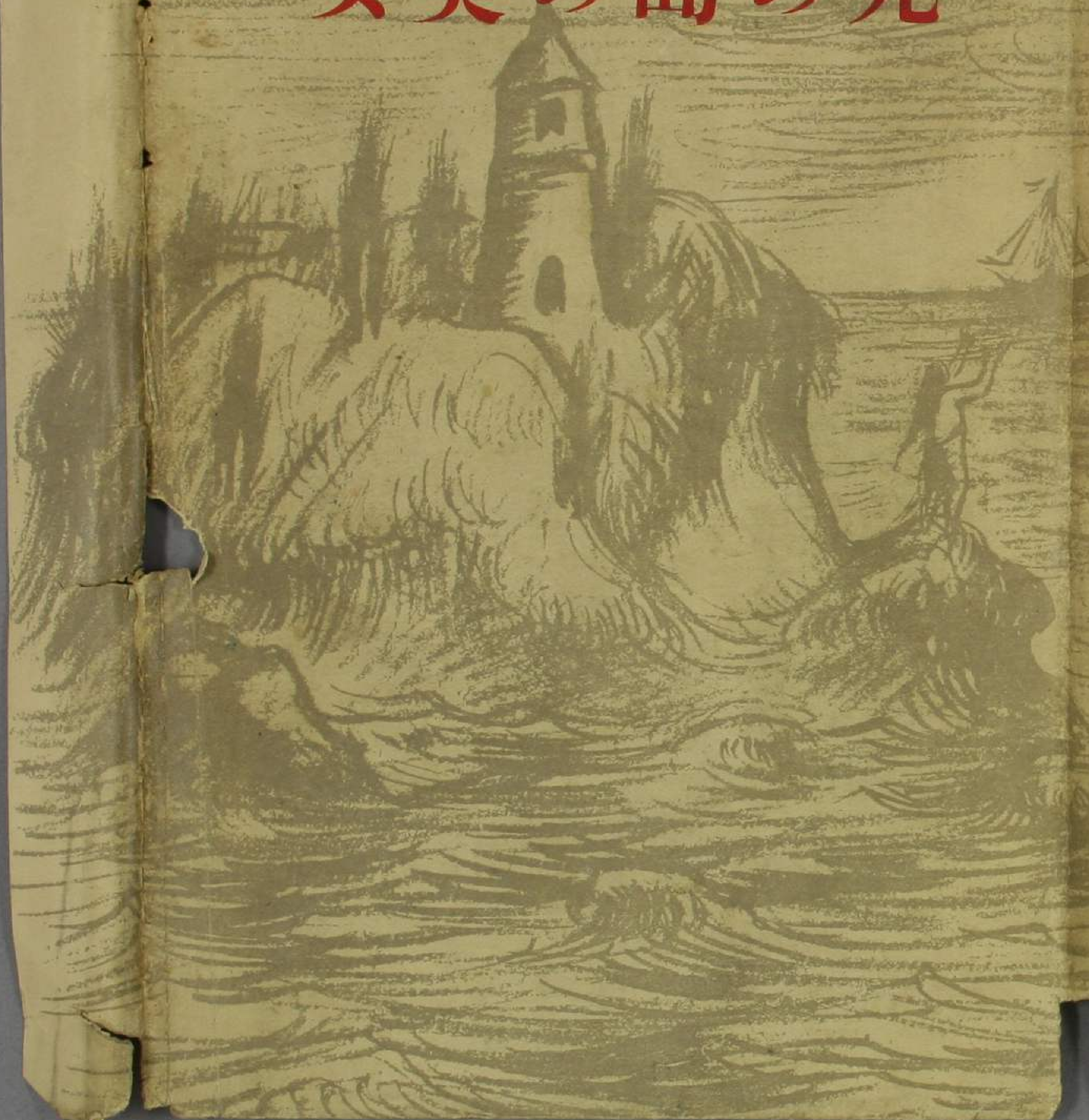
幻想詩劇

死の島の美女

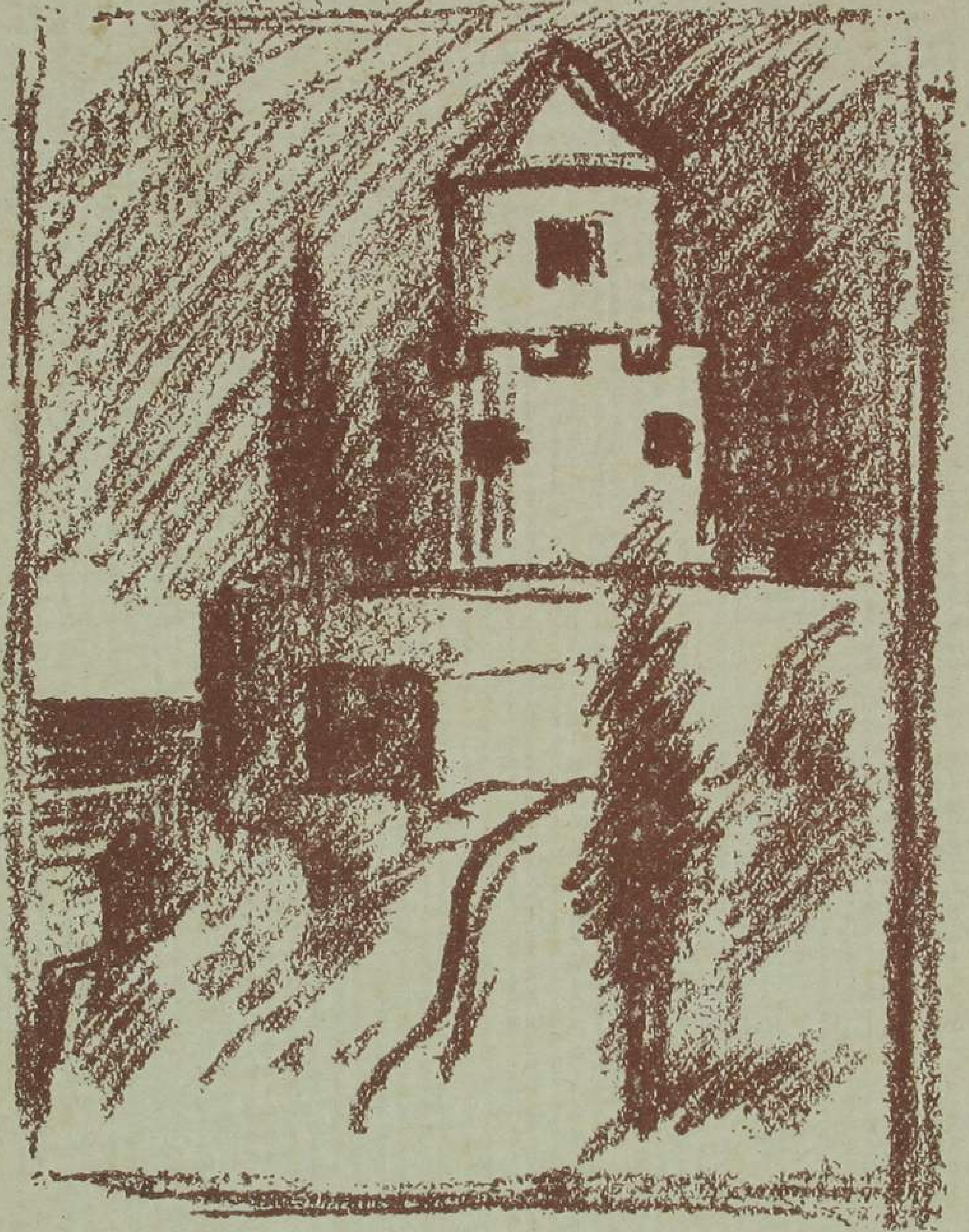
福田正夫著

幻想詩劇

死の島の美女



幻想詩劇 死の島の美女 福田正夫著



詩劇　死の島の美女

福田正夫著

幻想詩劇

死の島の美女

福田正夫著

HAMA
No. 706

新潮社出版

果てしなくとほき海の上に
われ、死の島の幻影を見たり、
　風荒く波立ちて、
　黒き潮の流れよるところ、
　遙かに戀の唄はひゞく。

そこに慕ひより、戀する者！
そはみな、海邊の白骨となりぬ。

目次

I　幻の死の島……五

II　緑の海の戀……二九

III　黒冥の水の上……五三

IV　戀に生くる人魚……七五

第一景・海の林

第二景・海の砂漠

V　幻の海の宮……一〇一

第一景・門前

第二景・海の宮の廣間

VI　幻の死の宮……一三三

VII　さすらひの美女……一三九

第一景・南の海

第二景・北の海

第三景・大洋にて

VIII　悲しき愛の唄……一五三

IX　幻の海の戀……一七九

第一景・暗き海の上

第二景・死の島

第三景・砕けたる死の島

X　幻の戀・海の戀……二〇三

第一景・幻の戀

第二景・海の戀

「祈りの魔女」の岩の話（叙事詩）……二二九

跋……一

死の島の美女

（場景・十七——叙事詩一）

幻の人々に就て

主要人物

美　女…………純麗の女性・後に幻の人魚

貴公子…………純麗の男性・後に幻の人魚

魔　女…………妖麗の女性

副人物

海の王…………壯年の男性

海の宮の姫……若き女性

海の精…………男性

魔の風の精……男性

魔の波の精……男性

魔の電の精……男性

藻の花の精……一、二……子供

海の宮の侍女……五人

海　蛇…………男性

聲

光

北　風

南　風

I 幻の死の島

場景

幻よ。そは一つの
黒き海の上に漂ふ死の島である。
いづこの果てとも知らず。
岸邊に白骨纍々として、
死の鬼氣そこにたゞよひ、
風荒れ、波吼え、
岩は魔の影と暗く、
斷崖は、死の岸のごとくつゞく、
幾千年、そこに永遠の冷暗が、
幻の死の島をとざしてゐた。

幻よ、そこにありて生くる者、
そは戀を貪る凄麗の魔女である、
たけなす髪を曳いて、
魔女は岩頭に立つのだ。
白く輝ける顏、
凄麗な、美しさに、
死の匂ひ高く、
豐沃の肢體に愛慾の血が燃え、
黒き瞳の底に毒の影がある。

死の島にも幻の年月が、
夢のやうに過ぎ去り、また來る、

その春よ、その時いつも、
遙かなる海洋の果てから、
東風が生溫く吹き渡つて來るのだ、
冷やゝかな氷岸溶けて、
氷塊は渦卷く波に搖れ、
凍れる白骨はかくかくと、
逆卷く波の影に踊る、
おゝ、その時、魔女はいつも岩頭に立つて、
遙かに、遙かに、兩手を上げる、
さうしてその呼ぶのは、
魔の戀の犧牲、若く美しき男性である。
犧牲よ、それの魅せられて來るのは、

美しき女性へのあこがれ
誰か、魔女の死の手が持つ爪の、
愛慾の胸に打ち込まれるするどさを知らう、
魔の唄のひゞき行くところ、
そこに純情の青春から、
戀と愛と欲望とに惹かれて來る者が多いのだ、
魔女は彼の魂を貪り、その肉體を奪ふ、
そしてすぐに彼女から、
戀の心は、泡のやうに消え去るのだ。
魔女はその死の島の岸に、
戀と愛慾にうつけたる彼を棄てる、
さうして更に新しき犧牲を呼ぶ、

かくして棄てられたる青春の彼らは、
戀を追ふ痩せたる幻影となつて
凍れる岸をさまよひ、よろぼひ、倒れる、
幾千年、そこに肉はくづれ、
骨は浪に洗はれ、風にさらされて、
永遠の恨みがそこに碎け、
長恨悲愁、いつか砂礫の中に、
凡ては埋沒してしまふのだ、
時はかくして悠久にめぐつて來た。

見よ、時は再び來た、
再びまた死の島の春、
岩頭に白き手は高く上げられ、

紅き唇からひゞきわたる魔の唄、
新しき戀を求むるために、
魔女の胸は燃え、美しき顏は輝き、
瞳をはるかのとほき島々に投げる、
魔の唄よ、とほくとほく、
そは海の底深く、空より高く、
ひゞきわたり、さえわたつて、
若い男性の、熱い熱い戀の胸を、
かき亂し、湧かしめるであらう、
光よ、戀よ、愛慾よ、そは一つの、
幻の中に燃ゆる焔である。

魔女、岩頭に立つてうたつてゐる。戀を追ふ幻影岩の下にひざまづいてゐる。幕、唄の間

に上る。

魔の戀の唄

東の風がそよらそよら
ほゝう、青春い男よ、
來るがいゝ、
戀の血潮をのませてやろ。
熱い吐息をふはらふはら、
ほゝう、胸の炎よ、
燃えるがいゝ、
戀の惡火を火つけてやろ。

やはい煮肌ですべらすべら、
ほゝう、伸びる生命よ、
煮えるがいゝ、
骨まで戀に溶かしてやろ。

魔女

おゝ、血が胸の中に集つて來るわ、
ごぼごぼ、ごぼごぼと、戀の血が毒の花のやうに咲き亂れて、熱く
熱く煮えるわ、
來ておくれ、私の新しい戀人、
お前の若々しい生命を私は待つてゐる、
胸は切なくて、苦しいのだよ、

私は喘いで、息を切つて、待ち焦がれて燃えるやうなのだよ、
ねえ、あらゆる歡樂を、その若い心に、身體に注いでやるのに、來ないのかい、
あゝ、熱い、私の身體はうづく、ほてる、火のやうだ、
あゝ、惱しい、私の望みはあらしだ、黑い雲だ、
美しい男よ、やつて來い、早く私の腕にとび込んで來い、
そして私の盡きない青春のこゝろに清い姿をなげかけておくれ、ああ。

魔女は身を伏せた、悶えた、
それから立ち上つて、さめざめと泣き咽んだ、
燃える身に、
岩頭にたまれる潮をうち注いでも

戀の生命は燃え狂つて來る、
おゝ、それは空をふさぐ毒雲の
身内にみなぎつてあらしを起すのに似てゐる、
黑髮は高く天をさし、
風は強く彼女を吹くのだ、
怒れる瞳は、嬌瞋に燃え、
惱める白き頰に、
妖麗の影がうごいてゐた。

幻影の一（よろよろと立ち上る）

私の生命、幻の美しい女、私を呼んでくれ、私はこゝにゐる、
私はあなたにこの生命をさゝげた、
あなたは、光のやうに私を抱いてくれた、

だのに、なぜいま、私を、私を、その岩の上に、
そしてあなたの、あのやはらかいしとねの上に、呼んでくれないの
だ。

魔　女

ほほほほほほ、波の聲にも消えるやうな、かぼそい聲は、
お前の痩せた胸から湧いて來たのかい、
それがお前の、私を呼びかける聲なら、私はとうにお前から離れて
ゐるよ、
お前の生命(いのち)は、もう私のこゝろの煮釜(にえがま)で、ぐづぐづに溶けてしまつ
て、影も形もなくなつたのだよ、
お前は棄てられたのだ、お前は消えて行けばいゝのだ.
引かれて行け、そして波の底で、白い骨になつてゐろ。

幻影の一（倒れながら）

おゝ、女神(めがみ)、戀人、あなたは……、
私は棄てられた、私は死ぬ、私は朽ち果てる、
私の行くところはなくなつた、そして私の歸るところもないのだ。
おゝ、魔の波が幻影の一つの、
足下に碎けて來た、
彼は引かれる、うめきながら海の底に引かれる、
そして影は消え果てる、
『一つ、』と魔女は指を折つて笑つた、
高らかに、あざ笑つた、
犧牲よ、かくして沈み行く無限の海の底に、

恨みは綿々として殘るのだ。

魔女

一つ、ほほほほほ、お前はもう消えて行つたね、
自分を恨むがいゝ、
自分の運命を恨んで、消えて行くがいゝ、
私は消え去るものを追ひはしない、いつだつて新しい戀ばかりが、
私に烈しいあこがれの火を點(つ)けるのだよ。

幻影の二（立ち上る）

おゝ、魔女め、嬌女(コケツト)め、
お前は俺の青春を、そして光を、どこへかくしたのだ、
かへせ、かへしてくれ、

俺はいまこそわかつたのだ、
お前のあくことのない情慾の中に、俺がとろかされてゐたのが、
俺はあの青春を持つて、自分の正しい戀人のところへ、
さうだ、殘して來た淸らかな少女の胸に、歸つて行かねばならないのだ、
彼女(あれ)は、あざむかれて來た俺を悲しんで、
夜々を泣き、日々に海邊に立つて、俺の歸るのを待つてゐるだらう、
俺は、彼女(あれ)を棄てゝ來た、
さうして今のみじめな戀の終りを見たのだ。

魔女

止めとくれ、そんなあさましい泣言は、
なるほど、お前の小さい戀の對手が、どこかで泣いてゐるだらうよ、

だが、お前はこゝへ來たのだ、
そして私の美しい胸から、歡樂の果てしない輝きを得たのだ、
それでいゝ、それでいゝのだよ、
果てしない歡樂のすぎたことを、いまさら悔いたつて歸らないこと
だ、
そしてこゝは戀の死の島だよ、
お前がほろびて行つたあとで、せめて白い骨でも、
お前を待つてゐる少女のところに、
波に浮かせてとゞけて上げよう、それがお前のあさましい運命さ。

幻影の二

呪へ、呪へ、凡てを呪へ、
あゝ、俺は破滅だ、

俺は、俺は、どうしたらいゝのだ、死より外に、俺の運命はないの
か。

寵女

さうだよ、それつきり、それがあたへられた行手なのだ。
凡ては死ぬ、お前もその一つだよ、
さあ、消えておしまひ、風よ、吹いておくれ、
この男に吹きつけて、白い骨にさらしてしまつておくれ。

幻影の二（倒れる）

駄目だ、凡て駄目だ、
風……俺の肉體は凍つて削られる、あゝ。

幻の風よ、それは魔の風だ、
幻影は倒れる、凍る、消える、ほろびてしまふ、
殘るのは白い骨ばかり、
『二つ、』と魔女は指を折つて笑つた、
高らかに哄笑した、
犠牲よ、かくしてほろび行く髑髏の、
恨みは、長く果てしなく盡きないのだ。

魔女

二つ、ほほほほほほ、お前はもう白い骨になつたね、
それがお前の望んだところだ、
波よ、その骨をうかべて行け、
南へ、南へ、とほく、海の底を引きずつて行つておくれ、

さうしてその男を待ちわびてゐる海邊にうち上げてしまふがいゝ、
さうしたら風よ、お前はそこの泣いてゐる少女にさゝやくのだ、
「これが戀人の終りの姿ですよ。」と、
悲しみに胸が破れて少女が死んで行かうと、私のかまつたことではない、
それが人間達の言ふ運命といふ奴さ。
これでいゝ、これですんだ、そして私は私の新しい戀人を迎へる準備をしなくてはならない。

幻影の三（立ち上る）

待て、待て、呪はれてゐろ、惡魔、
私が立上つたぞ、この胸の情火はまだほろびてゐないのだ、
お前の魔の力を、この胸の火で、燒き滅してやる。

魔女

ほゝ、まだゐたの、一つ、
私が惡魔かい、いゝよ、さうだわ、それに違ひないわね、
けれど、お前もそのまゝ、そこで消えて行つたらいゝのだ、
お前の胸の火が、そんなに燃えてゐるなら、
もつと熱い私の魔の火で、燒いて灰にしてあげよう、
燃え上れ、魔の火よ、
見すぼらしい瘦せた影を燒いて灰にしてしまつておくれ。

幻影の三（倒れる）

おゝ、おゝ、つめたい火よ、つめたい魔の火よ、あゝ。

魔女

三つ、ほほほほほほ、お前はもう灰になつたね、
その黒い灰こそ、戀の骸（むくろ）の姿さ、
さあ、風よ、吹きとばしておしまひ、とほく、海の上に、
それでいゝ、私は求めるのだよ、新しい戀人をね、
おゝ、戀人、戀人、新しい男よ、
私の胸はそれを思ふと燃え上つてくる、苦しい、惱しい、火のやう
だ、
あらしが私の心に吹いて來た、焰が高くうめいてゐる。
血潮が煮え上る、わき立つ、音をたてる、おゝ。

魔の戀の唄（複唱）

魔女はうたつた、高く朗かに、
再び、再び、白き手は高く上げられ、
彼女の燃ゆる瞳は海洋を越えて、
透かに戀の異性をかきさがす、
波も共にうたひ、風も共に叫び、
とほい地平の雲は赤く赤く、血の色に染まつた、
その時、魔女は見た、
とほき地平に雲二つに裂けて、黒き魔の海を越え、
あたゝかき綠の海の白くやはらかき光に輝くのを、
おゝ、そこから運んで來る東のやはらかい風に、
匂はしくかをつて來る戀の幸福、
それよ、綠の海にうかぶ一つの小さく赤き帆の舟、
幻よ、魔女はそこに、戀の美しい夢を見たのだ。

魔　女（よろめいて）

おゝ、おゝ、おゝ、雲よ、もつと開け、光よ、もつと明るくなれ、
舟だ、戀の舟だ、夢のやうな綠の海に、うかんでゐる戀の舟だ、
おゝ、二人ゐる、戀の夢の二人が、
男は若い、美しい、輝いてゐる、
えゝ、そして女も、若い、美しい、輝くやうにほゝゑんでる、
おゝ、若い貴公子よ、そなたこそ、
そなたこそ、私の待つてゐた者だ、
あゝ、私の胸は裂けさうに慄へる、あれこそ私が、
千年の間に、たつた一つ待つてゐた戀人だ、
棄てゝ來た者を一つに集めても、
あのほがらかな若い姿には及ばない、

おゝ、私の胸が燃える、うづく、わきかへる、
美しい女、お前を呪うてやる、
私の待つてゐた者と、戀を語らつてゐるお前を呪うてやる、
私の魔の力で、そしてこの戀の力で、
お前の戀をほろぼしてやる、
風よ、魔の風よ、あらしよ、來い、そして強く吹け、
波よ、魔の波よ、わきかへれ、
電よ、光れ、閃け、水路をとほく開け、
呼んで來い、若い貴公子を、そして美しい女を、海の底に沈めて、
私の胸の、焰の戀を癒やしてくれ。

場景かはる。綠色の海の幕しづかに前景に下りて來る。

II 綠の海の戀

幻よ、微風（そよかぜ）の吹くほとり、
緑の海は陽（ひ）にあたゝかく燃えてゐる、
これは戀の美しい海である、
幾千年、戀の岸よりかの岸へ、
赤き帆の小舟は戀の二人を載せて、
この戀の海を横ぎつて行つた、
とほくはろばろと、いゝ風も微笑み、
夢はこまやかな青春のよろこびを、
海の上にまどろませた、
見よ、いまも、ながれ行くは春の、緑の潮であり。
輝くは夢みる海の心である。

おゝ、かくてこの時この戀の岸を、

はなれて緑の海にうかぶ舟の一つ、
彼の岸は、とほく、はるかに、夢の雲とかすみ、
海は深く、青く、しづかに舟は辷る、
水の上に小波は、舷（ふなべり）をうつセレナーデの唄、
甘く、美しい、搖るゝ水の陰影よ、
うつるは幻の、戀の二人の姿である、
若き貴公子は赤い帆の影に、
かすかにほゝゑんで立つてゐた、
美女は清麗の白い手に、
水をすくつて、海底の美しい魚にこぼしてやる。

これこそ美しい戀の中の美しい戀、
緑の海は、幾千年、この美しい光を待つてゐたか、

この戀の舟一つ、そをのするよろこびに、
海は凡ての戀の舟を早くかの岸に急がせたであらう、
廣く、かぎりない水の上、
走り行くはこの一つの戀の舟ばかり、
若き貴公子は、美しく笑つた、
白皙の面に輝く、戀のほのかな羞ぢらひを見せ、
凛々しき眉宇、そしてきつとむすんだ丹花の脣は、
高い、高い戀の、正しい決心を見せてゐる。

美女は華かな貌(すがた)に、
純麗な戀にをのゝく可憐な花を感ぜしめる、
山上に咲く白百合の精か、
天上に輝く星の、海の上に下つて來た姿か、

やはらかにやさしく、溶けるやうなものごし、
ゆらりと揺るゝ豊かなる面(おもて)の、
あくまでも氣高く、白く、ほのかなるこそ、
魅惑の精靈の光に生まれた麗かな姿である、
夢みるやうなその黒い瞳(め)が、
いま、戀人の上にそゝがれる、
戀人もいまぢつと彼女を見つめてゐた。

戀の舟一つ、綠の海の上にうかび出る、龍頭の小帆船である、赤き帆しづかに揺れる、
戀の二人しづかにほゝゑんでゐる。とほく風の音、高波のひゞき、魔女の唄かすかに。

貴公子

陽(ひ)がかげつて來ましたよ、風がどこかで高く鳴つてゐる、

波がどこかとほくの方で高く起つてゐる、
電もとほくの方でうめいてゐるらしい、
綠の海の外で、あらしでも吹き起つてゐると見える。

美女

いゝえ、わたしにはきこえませんわ、
さうなの、わたしは、わたしの胸の奧で、ときめいてゐる血の音と
そよ風のやはらかい唄と、
波がうたつてくれるやさしい聲より外に、
なんにもきいてゐないのですわ。

貴公子

あなたはそれでいゝ、美しいことです、

しかし私は、海の底にひゞいて來る、それらの聲をきいてゐますよ、
それに交つて、唄がかすかにひゞいてゐる、
おゝ、みだらないやしい唄だ、
私はきゝたくない、私はその唄はきゝたくない、
だが釜の底でぶつぶつ呟くやうな、あの聲はどこから來るのだらう。

美女

いやしい唄ですつて、きいてはいけませんわ、
わたし、あなたにきいて貰ひたいのは、
私の胸の底の悲しい唄ですわ、それは悲しくてさみしくて、
涙がこぼれるほどなのよ、けれどやるせないほどうれしい唄ですの、
ねえ、ほらきこえるでしよ、
波と一緒にうたつてゐる、私のさみしい唄が……。

貴公子

きこえる、たしかにきこえる、あなたの胸の中で、
悲しい聲がする、しかしそれは燃えるやうな輝いた唄ですね、
あなたの生命(いのち)がうたふ、
美しい戀の唄ですもの、私はそれをはつきりときくのですよ、
さう、そして私はいま、なんにも外の聲をきいてゐませんよ、
あらしも止んだのでせう、
そしてあのいやらしい唄聲もとほくはなれてしまつたのでせう、
あの唄は私に不吉の豫感を起こさせた、
しかしいまはあなたの胸からひゞく、可愛いゝ聲より外に、
なんの聲もしなくなりましたよ。

美女

ありがたう、私、ほんとにうれしいの、
そしていま私もきいてゐますわ、あなたの胸が、私の唄と一しよに、
美しく鳴り合つてうたつてゐるのを、
あなたの心は私のもの、
そして私の心はあなたのもの、
あゝ、私は幸福ですわ、
悲しくて、さみしくてたまらないほど、私はうれしさに、
身も、心も、ときめいてゐますわ。

貴公子(美女と並んで坐る)

私も、私も、ほんとにうれしい、

舟は辷つて行く、風はあたゝかい、さうして二人、
永遠の戀の海に舟出をした、
ねえ、こゝは光に滿ちたあこがれの、
盡きせぬ愛に互の戀をちぎるところ、
光と夢に恍惚として醉ふところなのです、
私達二つの生命が、一つの路を行き、
やがて戀の彼岸に身をまかせて、
幸福の木の實を、高い情熱から生むのです、
これはよろこびだ、（手を取り合ふ）
永遠が私達によこしてくれた法悅だ、
青春のインスピレーションだ、
おゝ、私達こそ、めぐまれた愛の女神の下にあるものだ、
さあ、淸らかに、美しく、うたはう、

心の底で、高く、高く、うたひ合はう、
さうして盡きないよろこびの花を、二人の胸に咲かせよう。

戀はこれ、よろこびと光を生み、嘆きを遠ざける、
戀の歡喜は、人生の美酒であり、
そこに醉ふ者を、永遠に美しく輝かせる、
二つの手はかたくにぎられ
二つの胸はほがらかに鳴り合ひ、
美しき者二つ、いま戀のほのかなる情炎に抱き合ふ、
これを精靈の美しき舞踊と見よ、
そこにありて咲き出づる花々の、かぎりなき亂舞と見よ、
精靈は精靈に凭り、
花は花に、相凭り、相もつれて、

性の純情から、童貞、處女の舞を現ぜしめる、
陽の下にありて人は光に生き、
青春にありて人は戀の至上に生く。

おゝ、熱き熱き二つの魂よ、
語れ、無言の雄辯を、
うたへ、無聲の聖歌を、
幻よ、そこに見るもの、
かぎりない緑の海の上の、赤き戀の帆の影、
わくがごとき情熱、
閃きわたる高き感情、
ほつほつと燃え上る情炎、
なやましきほどの深く明るき夢、

あたゝかき脣、やはらかき手、
あゝ、永遠にひゞく戀のよろこびよ。

戀する二つの魂のさゝやき

美女

あなた、私達は、なんのためにこの人生に生まれて來たのでせう。

貴公子

戀に生きるためにです、
人生に生きる……それはこのよろこびの戀なのです、
それより外に人生はないのです。

美女

おゝ、戀に生きるために、
それなら人生の苦しみや悲しみが、なぜあるのでせう。

貴公子

それも戀のためにあるのです。
苦しみや悲しみは、みな戀を求めるあこがれから湧く、
そして戀のよろこびは、人生で、
それらの正しい慰めとなるのです。

美女

魂は求めてゐますわね、

求められない魂は、どこかですゝり泣いてゐるでせう。

貴公子

それもある。それも事實です、
しかしそれ故にこそ、この求めて得た戀に至上の價値がある、
求めて得た一つの魂に、
私達は正しい行手を見つけるのです。

美女

求めた魂を見つけた時、
戀はどうなるのでせう、魂の抱擁、二つの理解、
それだけで私は滿足しませんわ。

貴公子

さう、それが正しい光です、
魂が求め得た時に、一つの魂は一つの魂と一つになる、
二つが完全に一つになるのです、
その時、魂と共に、肉體もそこに一つになるのです、
光と影とが相交錯するやうに、
魂と肉體はそれ自ら結んでゐる、
そこに魂の抱擁は、新しい光となつて、肉體に輝きわたるのです、
二つは直ちに一つになる、肉體に於ても、戀は、
互の胸に互の呼吸を感じて、
熱い心に溶け合つてしまふのです。

美女

おゝ、美しいあなた、あなたは私を生かした、
私は、いま、眞實の光を浴びましたわ。

貴公子

清らかな、少女、あなた、私達は美しいものを得た、
ほんとの戀は、こんなに美しいのです、
さうしてそこには光が花咲き、よろこびが踊るのです、
私達のこの戀こそ、
人生の上に咲く、至上の戀の象徴でなくてはならないのです。

美女

おゝ、私達は永遠のものを得ましたのね。

貴公子

さうです、大膽に私を抱いて下さい、
私の肉體はあなたのものです、私はあなたと一つになりました。

美女

ほがらかな、美しい戀よ、
このよろこびは祈りに似てゐる、
私はあたゝかいのですよ、
そしてかぎりない光をこゝにみつけましたわ。

無言の戀の魂のさゝやくのはそれである、

光の生命は空に搖れ、海は綠の瞳(め)でそつと、
彼らのよろこびをさしのぞく、
小波よ、眠りの戀をさます勿れ、
そよ風よ、よろこびの夢をやはらかくゆすれ、
幻の戀よ、光よ、
これは正しく美しい者の、
千年に一つの戀である、
さはれ、あらしも來るであらう、
雲もまた、黑き魔の海にわくのだ、
北風もまた、死の島から吹き起る。

魔の戀の唄、かすかにひゞく、しづかなしかし妖氣をはらんだ氣配。

貴　公　子（しづかに）

海はあたゝかいですか、
水はなめらかに、あなたの白い手を洗つてゐますね、
海はしづかな美しい夢を見て、
心におどろいてゐるでせう、
あなたの、美しい影が水の上に浮いてゐる。

美　女（水に手を入れて）

水はあたゝかですわ、そして私の心も燃えてゐますの、
ねえ、私はいま水の上に、
美しい魚がうかんで來たのを見ましたわ、
あなたの凛々しい姿をのぞきに、

海の底からうかんで來たのではないでせうか。

貴　公　子

いや、それはあなたの影を、
したつて來た、海の美しい魚でせうよ、
その美しい白い手は、きつと海の底にも、
やはらかい戀の匂ひをまいたのでせう、
だが、私は、その手を、
海の魚にやりはしませんよ、
あなたの小指の先の小さい水たまさへ、
私の心に浮いた愛の眞珠の氣がするのですから。

美　女

えゝ、それはさうよ、私の心も、胸も、手も、
それはみんなあなたのものですわ、
けれど、私、なんとなく心配になつて來ましたわ、
もしかすると海の魚は、
私達に、不吉なことを敎へに來てくれたのではありますまいか、
陽がかげつて來て、風がとほくの方に、
吹き出して來たやうな、氣がしますの。

貴公子（おどろいて）

さう、さうかも知れない、うたがきこえるな、
あなた、きこえますか、
どこか、とほくから、あのいやらしい唄の聲が、
海の底をつたはつてひゞいて來る、

おゝ、私の胸が波だつて來たぞ、
なにか、恐しいことが、海の上におこらねばよいが、
あゝ、きこえる、きこえる、唄がかすかに強く、
まるで心をかき亂すやうにひゞいて來る。

美女

あゝ、あなた、水の色が、かはつて來ましたのね、
恐しい、私、なにか胸がいたむ、
あゝ、私には唄もひゞかない、
けれど、重い大氣が、私をおしつけてゐますわ、
血が凍るやうに慄へて、
心が、小鳥のやうにおびえてゐる。

貴公子

いや、恐れてはならない、
あなた、私に、しつかりとつかまつてゐるがいゝのです、
私達は正しい戀の海に、
赤い情熱の帆を上げてゐるのです、
おびやかされるものか、
私達は、戀といふ強い武器を持つてゐるんですからね。

魔の戀の唄高く、一しきり魔女のすゝり泣き、それからヒステリックな哄笑……しづかに幕下りる。

III 黑冥の水の上

幻よ、そこは、死の島をはなる、
黒き魔の海の上である、
風なく、光なく、沈々たる妖氣そこに浮き、
冷たき水は油のごとくよどみ、
ぬめりぬめりと小波は時として闇を洗へど、
永劫の沈靜はさみしさを越え、
陰々たる、深き惡夢を感ぜしめる、
忽然として波うづまく時、
沸々として水は湧き上つて來た、
見よ、黒き妖魔は水の底から立ち上る。

魔の波の精

うわあ、俺は疲れて眠つてゐた、

どんなに喘いだつても、
時が來なければ駄目なのだからな、
だが、もうその時が、やつて來たと見えるな、
おうい、暗い空の上に眠つてゐる魔の風、
そして黒い雲の上にやすんでゐる雷よ、
みんな降りて來い、話があるのだ。

暗き空を音なくすぎるもの、それは魔の風である、
黒き雲の上に、あらしをはらむもの、
それは、とゞろき閃く、魔の雷である、
陰々たる夜のごとき空から、
彼らはとび翔けつて來た、
忽然として、そこに立つ黒き影よ、

呪はれたる惡の寵兒は、高く毒だみて笑つた。

魔の風の精

ふわあ、やつて來たぞ、どんな用があるのだ、
俺は忘れやしない、戀の海にうかんでゐる一人を、
おびきよせ、そして一人を海の底にしづめてやる、そのことだらう。

魔の電の精

それにきまつてるわな、わつわつわつ、
俺は雲の上からとほくながめてゐたよ、
さうして奴等が、もう大分この黒い海に近い邊を、
走つてゐるのを見つけたのだ、
そしてな、死の島の岩の上ではな、

あの美しい女がな、狂ふやうに俺達を呼んでゐたよ、
耳をすまして見ろ、きこえるだらう。

魔女の聲（とほく）

おうい、魔の風よ、波よ、電よ、
時はまためぐつて來たのだよ、あらしを起し、波をたゝしてくれ、
あゝ、あれから三度目の、春が來た、
私はこの長い間、呪ひの涙をながしてゐたんだよ、
緑の海の上の、美しい男は、
戀のよろこびの、夢のやうなうれしさを赤い帆につゝんでゐるのに、
私は悶え、うめき、泣いてゐたのだ、
みんな、この私の苦しさを知らないのか、
さあ、この胸のいたさを、早く癒してくれ。

美しい女を海の底に沈めてくれ、
美しい男を、死の島に奪つて來てくれ、
綠の海に黑い潮をながしこんで、毒の色でつゝんでくれ。

魔女の戀の唄、惱しくきこえる。三つの妖魔うなづき合ふ。

魔の波の精

うわあ、きいたか、ほれ、うたつてゐるぞ、
奇麗な聲だ、俺はうつとりするわ、骨身がうづいて來るぞ、
彼女（あいつ）の言ふことは、俺達はきかなくてはならないのだ、
なあ、この海は、この魔の海は、
みんな彼女（あいつ）が支配してゐるのだからな。

魔の風の精

ふわあ、さうだ、そのとほりだ、
しかし三年前から、俺達は彼女（あいつ）の望みのために、
根かぎりはたらいてゐるのだ、
そのくせ、俺達の魔の力も、あの綠の海に行つては、
まるで骨なしのやうに萎えてしまふのだ、
魔の波よ、これがうまく行く、いゝ仕掛がわかつたか。

魔の電の精

わつわつわつ、心配することたあないよ、
あの美しい奴等をのせた舟が、この魔の海に近くなつたのは、
俺の眼ではいきいきりと見たのだ、

戀に醉つてる間に、赤い帆がかたむいたのか、どうだかあ知らないがよ、
時つてえのがこの海の上にもあるとすれば、
そいつが近くなつたことはわかつてゐる、
呪はれた戀の奴らぬ、
さあ、行つて惡い夢をさましてやらう。

霓の波の精

うわあ、ようし、俺は黑い潮をながして、
綠の海をくらくしてやるわな、そして赤い帆の舟を、
急にこの魔の海に引つぱり込んでやる、
舟はすぐくつがへるさ、
風よ、お前は俺のうかべた美しい男を、死の島に吹き送れ、

女は海の底の藻にからんでやる、
うわあ、とび去れ、風よ、雹よ、
さあ、これから俺達の暗い仕事がはじまるのだ。

三つの妖魔消える。魔の戀の唄高くひゞく、風の音、雹の閃き、波高まる。

霓　女（とほく）

ほほほほ、はじめてくれたんだねえ、
波よ、風よ、雹よ、おゝ、黑い潮が綠の海にながれて行く、
それでいゝ、それでいゝ、
おゝ、戀人、美しい男、そなたはもう私のものだ、
ほほ、舟が黑い潮にのつたよ、
走れ、早く綠の海をぬけ出ろ、

雲よ、もつと開けろ、私はよく見てやる、見てやる、
ほほ、ほほ、ほほ、私の胸はよろこびの惡夢でいつぱいだ、
來る、走つて來る、舟が走つて來る、
おゝ、胸がうづいて來た、脣がかはいて來た、
もう私のものだ、男は私のものだ、
身體が熱い、燃える、狂ふ、燒ける、憎い女め、早く沈んでしまへ、
お前の戀人はもう私のものだよ。

幻よ、とほく死の島に、
黒き潮は高く鳴りひゞいた、
波のしぶきの上がるところ、
魔女は亂舞の手を上げる、
黒髪は長く、

愛慾の三年を、風に荒れ、もつれ、さわぎ、
白い魅惑の顏は輝きわたる、
暗い死の島の岸邊にあつて、
戀の情慾はたゞれた心をとろかし、
彼女の惡夢は胸の底にうづきいたむ、
それよ、それが魔の戀の、
妬みと、惱みから湧いたものである、
狂へる戀に魔女は身を焦がしてゐたのだ。

美女

魔の戀の唄、高くひゞく。狂瀾、怒濤、あらし、電閃……赤い帆の舟、潮にのつて黒い海の上に流れ出でる。

おゝ、あなた、恐しいことですわ、
どこへ、どこへ、私達はながれて行くのでせう、
空が夜のやうに暗い、
波が、水が、氷のやうにつめたい、
そして恐しい聲が、水の底からきこえる。

貴公子

いや、恐れることはない、
私が、私がこゝにゐる、私の心はたしかだ、
あらしにも、波にも、風にも、
私の熱い戀はくじけはしないのですぞ。

美女

いえ、赤い帆がちぎれた、
帆柱が朽木のやうに折れてしまつた、
おゝ、そして恐しい聲が、また、水の底から、
いゝえ、いゝえ、空の果てから、
いゝえ、いゝえ、黒い雲の中からきこえる、きこえる。

貴公子

いゝのだ、恐れることはない、
私の心は強い、
なにものにも、私は負けはしない、
さあ、私達は抱き合はう、
舟が沈まうとも、
私達は海の底で熱い戀をつゞければいゝ。

霙　　女（とほく）

うたふがいゝ、吼えるがいゝ、
そして泣け、嘆け、死ね、
ほほ、海の底で藻のからむのは、美しい女の手と足だよ、
死んだ身體が波に洗はれてくさるだろ、
私がそれを念じてやる、
波よ、波よ、早く舟をかへすがいゝ、
私の胸が熱くなつて、一時も戀人を待てないのを知らないかい、
私の心は三年の間うづいてゐるのだよ、
さあ、風よ、波よ、舟を破つておしまひ、さあ、
千年の間待つてゐた美しい男の、
やはらかい肌が、私の胸を煮えさせるわ、

ほほ、狂ふわ、泣くわ、わめくわ、
いくらでも叫ぶがいゝ、
女よ、お前の戀人は私のものだ、私の得たものだよ。

霙の精達の聲

（水の底から）うわあ、もうこつちのものだ、
それい、黒い大波だ、
（空の上から）ふわあ、うまく行つたぞ、それい、つめたい風だ。
（雲の中から）わつわつ、さわぐな、さわぐな、それい、光の彈丸だぞ、
うわあ、それい、もう一つ、白い大波だ、舟が搖れるわ、
ふわあ、それい、死の風だ、舟がかたむくわ、
わつわつわつ、それい、魔の熱い光だ、舟がとろけるわ、

うわあ、覆してやれい、沈めてやれい、
ふわあ、破つてやれい、凍らしてやれい、
わつわつわつ、おしまひだ、時はきたぞい。

美女

駄目、あゝ、あなた、戀人、
風がつめたいわ、波が舟をのむわ、あゝ、あゝ、あゝ。

貴公子

おゝ、恐しい聲もするぞ、
さあ、これがおしまひだ、いや、いや、永遠の戀のはじめだ、
おゝ、おゝ、手をとれ、はなすな、はなすな。

舟くつがへる。風の音はげしく……急に波がしづまる。魔の戀の唄、たかくひゞく。
どこかで美女のすゝり泣きの聲がする。

美女（水の底から）

戀人よ、波の手が私をとらへて、
藻のぬめぬめした手が私の身體にからみついたのですよ、
はなれてはいや、戀人よ、
あなたは、どこへ行つてしまつたの、
あなたは、私をはなれて、どこへ行つてしまつたの、
私はこゝであなたを呼んでゐるのに、
あなたは、こたへてくれないの、
あゝ、私の悲しい心はふるへてゐる、泣いてゐる、
おゝ、私は、海の底で夢を見よう、

戀人の夢を見よう、長い長いさみしい夢を見よう、
泣いて、泣いて、眠つて、悲しい夢に眠つて行かう。

妖魔の影三つ、水の上に立つて互にさゝやき合ふ。どこかで美女のすゝり泣く聲。

魔の波の精

うわあ、うまく行つたぞ、これで俺達は、
またしばらくの間、ゆつくり眠れるといふものだ、
おい、そして男はどうしたのだ。

魔の風の精

水の上で凍つて、眠つてゐたわな、
俺はそれを、死の島の岩の上に連れて行つたよ、

そしてやはらかい石の上に
そつとねかして歸つて來た、
ふわあ、いまごろ美しい女は岩の上からおり立つて、
あの熱い胸であたゝめてゐるだらう。

魔の露の精

わつわつわつ、俺は雲の上で、そつと見てゐたよ、
女はな、男を抱いて、あの白い頰を
男の顏につけて、まだうたつてゐたよ、
眠つてゐる男の心に、魔の戀を吹き込んでゐたのさ、
俺はすぐ、雲から下りて來た、
それだけ見れば、あとはあの物狂ほしい戀の、
幻のやうなすがたを見るだけだからな。

靈の波の精

うわあ、よからうよ、俺達の仕事はすんだ、
さあ、歸るとするか、
そして眠つてゐる間に、死の島のたのしい夢の、
かけらでも見るとしようわな。

（他の二人）ふわあ、わつわつわつ、それがいゝ、それがいゝ。

三つの影消える、魔の戀の唄歩む、しづかなる黒き水の上、美女のすゝりなきの聲、
一しきり。しづかに幕。

幻よ、時すぐれば、
黒き海の上は永劫の靜寂にとざゝれる、

そこにありて生くるもの、
魔は眠りの夢に、陰影をはらんで、
呪ひの闇に、死の手をのべるであらう。
見よ、光なき水の上に、
とほくかすかに浮く死の島の幻影、
かゝる時、海の上を、黒き鳥は行く、
そは死せる魂の空を翔けり行くもの、
惱み、よろぼへるものの、
光の國を求めてとびすぐるもの、
さはれ、こゝは死の海である、
暗くけぶれる黒き魔の海の、
つめたい、ぬめつた靜寂こそ、
人生にある惡夢の一つではなからうか。

IV 戀に生くる人魚

第一景　海の林

潮のたゞよふところ、波の底に、
深く暗い海の林があるのだ、
そこには一面の海藻がしづかに揺れ、
陰欝な悩みと、
さみしい感覺のうれひが擴がつてゐる、
黒い潮に蔽はれるところ、
そこは永遠に生氣なく、
微光はとほくかすかに湧いて、
死の洞窟の冷かさが、
いつも成長をとざしてゐる。

林の蔭、死灰のつもるあたり、
美女は死の眠りに、
ほの白い顔を岩の上におき、
かすかにほゝゑむ脣許に、
生きたるまゝの美しさを見せ、
長くすゝり泣いたあとの悲しみが、
涙となつて頬に流れてゐた、
かくして長き後のことである、
美女はふとめざめた、
さうして戀人を思つた。
さめざめとまた嘆けば、

海の底のしづけさは破れて、
すゝり泣きの聲が、
水の上にもきこえるであらう、
さうしてまた空高い星々にも、
その悲しみはひゞくであらう、
夜である、
高き星の光の一つ、
海底にその悲しき聲のありかを求める。

美女よ、戀を失へる女性よ、
そなたが泣くのは海が泣くのだ、
海は悲しみにふるへて、
さめざめと高い空をうつして泣く、

星はその海にさゝやいた、
「哭くな、立て、
ありとしあるものゝ悲しさを、
うち越えてたづねて行け、
戀によりてこそ、
女の心は永遠に生きる、」と。

美女は立ち上つた、
うなだれて行くは海の底の、
暗くさみしいほとりである、
とぼとぼと路をさがせど、
海の底ははてしもなく廣いのだ、
潮の風が吹いて來る、

底のうれひの暗さに迷へば、
さみしくもその身が一つ、
いづこをたづね、
なにを呼んで、
戀の行方をたづねようか。

うすい光、水の上からさして來る。藻の花の精二つ、小さい影を見せる。

藻の花の精の一

おうい、來てごらん、奇麗な人が泣いてゐるよ、
水の上から降りて來て、
藻にからまれて眠つてしまつた人だよ。

藻の花の精の二

さうだよ、藻の葉にからまれてゐたのを、
わたしがそつとといてやつたのだよ、
なぜと言つて、私のあの奇麗な人が、さみしさうに、
眠りながら、すゝり泣いてゐたからだよ。

藻の花の精の一

さうかい、よかつたねえ、
そしてあの奇麗な人は、なにをそんなに泣いてゐるの、
ねえ、それを知つてゐるのかい。

藻の花の精の二

わたしはなんにも知らないよ、
だつて、あの人は水の上から來たのだ、
そしてすぐに、
さめざめと泣いてゐたのだよ。

藻の花の精の一

ねえ、きいて見ようか、
わたしは、それをきいて、一しよに泣いてみたいのだよ、
あの人は奇麗だもの、
そしてあんな奇麗な人を、わたしはまだ見たことがないからねえ。

藻の花の精の二

きいてごらん、私もそれを知りたいんだよ、

悲しい話だつたら、私も一しよに泣いてやりたいんだよ、
ねえ、早く行つて、きいた方がいゝよ。

藻の花精の一（走りかゝつて）

あなた、奇麗な人、なにを泣いてゐるの、
私達は、藻の花ですよ、そしてあなたが藻にからまれてるのを、
このお友達が、といて上げたのですよ。

藻の花の精の二

さうでしたよ、ねえ、あの時も、あなたは泣いてゐましたよ、
水の上で、悲しいことがあつたのですか。

美　女

ありがたう、私は泣いてゐますよ、
水の上で、波があれて、私の戀しい人が見えなくなりましたわ、
私はひとりぼつちですの、
私は、私は、それで泣いてゐたのですよ。

藻の花の精の一

まあ、かはいさうに、なんてさみしい話でせう。

藻の花の精の二

あゝ、私も、涙がこぼれて來た、
水の上は明るいと思つたら、ほんとにさみしいんだねえ。

美女

ありがたう、おゝ、あなた達も泣いてくれるのね、
私、私、ほんとにお禮を言ひますわ、
あゝ、だが、ねえ、私はその戀しい人を、
あてどなくたづねなくてはならない、
私は、私は、どこへ行つたらいゝでせう。

藻の花の精の一

おゝ、かはいさうに、
けれどそれは私達には、わからないことですよ。

藻の花の精の二

さうだ、わからない、わからないねえ、
あゝ、そんな戀しい人をたづねてゐる人に、

私達は教へてあげられない、それは悲しいことですよ。

美女

ありがたう、泣かないで下さいね、
私は行きますわ、あなた方の親切は忘れませんわ、
どうぞ、私のために、
戀しい人が探せるやうに祈つて下さい。

藻の花の精の一、二（共に）

えゝ、きつと、きつと、さよなら、さよなら。

美女の求むるものは、
美しき男であり、戀人である、

涙ながしつゝ別るゝところ、
おゝ、うるめる藻の花の瞳よ、
海の水はつめたいが、
生けるものゝ心はそこに咲き、
悲しみの幻を畫いて、
死の夢に、生の影を見せるのだ、
嘆きつゝ、悲しみつゝ、
美女は行く、その心に一つ、
戀の幻は生きてゐる、惱んでゐる。

第二景　海の砂漠

幻よ、そこは海の底なる、
果て知れぬ、廣き大道である、
平坦々として水に煙るところ、
草もなく、樹もない、一面の砂原、
近く一つの影もなく、
とほく寂寥の水が浸たしてゐる、
砂は荒れ、
路はとほく、
かぎりのない幻の光が、
點々として水の上から落ちて來る。

『君よ、きゝたまへ、
私の幼い日に、私はその幻を見たのだ、
孤獨な寂しい、海の底の幻影を、
いま思ふ、その時、私は、
たゞ一つの、小さい涙の兒であつた、
ひとりぽつちの寂しさに、
泣いて歸つた夜の、夢の中に、
私は海底の廣い路に立つてゐた』
その幻の日の大道よ、
おゝ、それは海の砂漠だ、
かぎり知れない、砂のつゞきだ、
水底にそれがあり、

悲しみの兒はそこに立つてゐる。
幻よ、美女はそこに立つてゐる、
泣いてゐる、祈つてゐる、
そのかぎりない砂の上、
あるものは唯一つ、彼女とさみしきその影ばかり、
點々とした水の天上の光の一つが、
斜に、ほのかに、うすく明るく、
彼女のさみしい姿をてらしてゐる、
孤獨よ、その悲しさ、
よろこびの春の戀はうせて、
殘るは水の底の嘆きである。

美女は身をふるはせ、
薄命の戀を悲しくやるせなく嘆く、
戀人よ、いづこにあるか、
たづねる行手は廣い、
あてのない、長い長い路上、
水底の風は潮である、
それがとほいところから吹いて來る、
さみしくとほく消えて行くもの、
あゝ、戀よ、さみしき戀よ、
戀の果て知らぬ深淵に、
一人泣くは彼女ばかりかは、
戀の二人は、かぎりないよろこびであり、
一人はまた、かぎりない悲しみであるのだ。

彼女の涙は水底から、
美しい眞珠の泡となつて、水の上にのぼつて行く、
それは海の上に浮いて瞳になるのだ、
涙の悲しく美しい瞳になるのだ、
海を見よ、海の瞳はその悲しみを、
深い底にたゝへてゐる、涙の戀にたゝへてゐる、
……彼女はひざまづいた、
『私は祈つてゐますの、
どうか、私の戀人に逢はせて下さいませ、
そしてさみしい私を、
光のある行手にみちびいて下さいませ。』

あゝ、呟きの海原よ
この時、海洋も共に泣く、
空の星も泣く、
恐らく、美しい魚もまた泣いて、
戀の幻の美しさにうたれるであらう、
美女の黒い瞳に、
あはくかすむ彼方、
そこにたゞ一つの明るい光が、
かすかにとほくうつゝて來た。

美女、ひざまづいてすゝり泣いてゐる。海の精しづかに立つ。うすい天上からのかすかの光り。

美　女

おゝ、私は悲しいのです、
私はさみしく、やるせないのですの、
私は自分の行くところを、
すこしも知りません、
身はふるへ、心はあらしの中の小鳥のやうにいたんでゐます、
私を、私を、その行手を、
私のさみしい胸にをしへて下さいませ。

海の精（立ちよつて）

美しいお方、お立ちなさい、
泣かなくていゝ、悲しまないでいゝ、

ねえ、海の底で迎へるのは、
いつも死の骸(むくろ)より外にないのですぞ、
しかしあなたは、戀の情熱で、その死から生きたのです、
戀こそは、永遠に生きる光なのですよ、
あなたの戀の思ひは、海の底の美しい者を心から感動させ、
あなたの悲しみは、それらを泣かせた、
あなたにとつて、いま海の底の路は、
はるばると果てしなくとほいであらう、
しかし悲しみを耐へて、あなたは行かなくてはならない、
路の果てに、海の宮がある、
宮の姫はあなたを迎へてくれるでせう、
そして宮の王はあなたを、海に生きるものにしてくれるであらう、
それは美しい人魚でありますよ、

あなたは海の上にうかんで、戀人をたづねるがいゝのです。

美　女（立ち上る）

おゝ、美しい人魚に、私は、
私は光をみましたわ、私は急ぎます、私の新しい生命の行手に。

海の精

行くがいゝ、行かねばならぬ、
そこにあるのは永劫の生命です、久遠にして、
ほろびないものです、
路はとほい、さみしい、果てしない、
しかし勇氣がそれを助けるでせう、
さうしてあなたは、戀の悲しみの淵から、

さみしくとも希望の水の上に立つのです。

美　女

おゝ、お禮を申します、あなた、
私は、あなたの言葉から、かぎりない力を見つけます、
あなたは、あなたは、どこから來ましたか。

海の精

私は海の中の、こゝにあり、またかしこにあるものです、
海に生まれ、海に生きる、海の精なのです、
あなたが、海に生きて、力の足りない時、私を呼びなさい、
私はその聲をきけば、とほく早く行くでせう、
さらば、また逢ふ日まで、

あなたの行手は光のかすむ彼方です。

海の精消える。美女さみしく、力强く立つ。幕しづかに下りて來る。

幻よ、希望は光から湧く、
悲しみつきず、果てしなく、
なやみは涙と共にあれど、
戀に生くる時、
そこに永生のしるしがあるのだ、
かくて美女は見た、
永く生くる戀の希望を、光を、
やるせない胸を抱いて、
行方果てしなく見つむれば、

また涙が落ちて來る、
しかしこの時、涙は悲しみと共に、
溢るゝよろこびともなつて來る、
戀する者よ、立て、
嘆きのうちより起き上れ、
そこに永遠にほろびない路があるのだ。

V 幻の海の宮

第一景　門前

幻よ、廣き海原の底に、輝ける光の國がある、
煙れる水の夢につゝまれて、
そゝり立つは、海の宮である、
佳麗なる青き虹のごとく、
それは玲瓏たる光につゝまれてゐる、
光の昏るゝ夕方、
永遠の沈默が、その門扉をとざした時、
餘光の灼熱に燃ゆるごとく、
なほもその夢は輝きわたり、
幸福の幻影を心に投げてゐる。

寂光土よ、水の夕よ、
かぎろひわたる光の街まで、
暗い路をぬけて來たたび人の、
心に觸るゝその望みは、
いく度か、そこにさみしき希望を畫いたであらう、
砂漠に泣く者の、
求めるオアシスはこゝにある、
『きゝたまへ、とほい日に、
母はその子に、浦島の物語をした、
さうして幻影は、
幼いものの瞳に浮いて來た。』

すぎこし幾日かの、
涙の路をふりかへれば、それは夢としか思はれぬ、
美女はさみしくも、とほく果てしなく、
はるばると海の底を越えて來た、
夢なればこそ、彼女の悲しい思出は、
長くとほく、果てしなく、
辛さを忘れ、悲しさを忘れて、
人の生の一生にも似たる苦しい旅路を、
戀のために急いだのだ、
かくて辿り着いたところ、
輝ける光の宮を前にして、
かすかの吐息、うつとりと悲しいよろこびの幻、
けれど夕日は落ちて行く、

おゝ、昏れ行く壯麗の宮、
彼女はなにを感じたであらうか。

美女は身を投げふせた、
よゝと泣き崩れた、
悶え、うめき、咽んだ、
あゝ、彼女の悲しみは、戀を追ふいたましい手傷である、
胸を嚙むは歎きばかりかは、
戀を失へるものは、
よろこびにさへ悲しい思出があるのだ、
長い後に彼女は立ち上る、
ほとほとと扉をうつ、
しかし宮の門は特を定めてある、

彼女は泣き崩れた、
泣きながら眠つた、
幾時かの後である、曉はしづかに、
とほく輝かしくおとづれて來た。

壯麗なる海の宮の門の前、美女しづかに眠る。曉、門扉しづかに開く。侍女二人出て來る。

侍女の一

曉が來ましたのね、私は昨夜悲しい夢を見ましたよ、
美しい水の上に住む人が、
泣きながら、海の砂の路を歩いてゐましたわ。

侍女の二

さう、私は眼がさめて、
どこかですゝり泣いてゐるさみしい聲をきゝましたよ、
それからかすかな、悲しさうな眠つてゐる女の呼吸を、
おゝ、こゝに眠つてゐる、この美しい人に相違ない。

侍女の一

ほんとに、悲しさうな顔をしてゐますわ、
そして涙が頬をながれてゐる、
水の上で、不幸に逢つて來たのでせう、
私の夢に見た人も、やつぱりこの美しい人ですわ。

侍女の二

起して見ませうか、そつと呼んで、

夢をさまして、とほい水の上の、悲しい話をきゝませうか。

侍女の一

いゝえ、いゝえ、この美しい女こそ、
宮の姫さまが話された、悲しい戀の人に相違ありませぬ、
話にきいてすら、悲しくて泣いたものを、
その人の涙を見たら、私達はどうなるでせう、
さう、私は姫さまに、
美しい人が見えたと、告げてまゐりませう。

侍女の二

私は、ぢつとこの人を見まもつて、
悲しいわるい夢にうなされたら、そつと呼んでやりませう。

侍女の一、入る。長い間……美女ぱつちりと瞳をひらいて、侍女の二を見る、おどろいて立ち上る。

美女

許して下さいませ、
私は、悲しい夢の中に、長い間眠つて居りました。

侍女の二

いゝえ、いゝえ、夢からおさめなされたか、
あなたは悲しい不幸に逢つて、
水の上から下りて來なされた、
私達は、あなたの悲しい話をきゝましたよ。

そしてあなたと一しよに泣きましたよ。

美女

おゝ、私は、うれしいのですよ、
けれど私を、宮の姫さまに逢はせて下さいませ、
私は、私は、海に生きて、
私の別れた人を、たづねたいのですの。

侍女の二

美しくて、悲しい方よ、いま外の者が知らせに行きました、
姫さまは、あなたを、待つてゐましたの、
さあ、どうぞ、私のあとを、つゞいて來て下さい。

しづかに二人退入る。曉の光美しくふりそゝぐ。

第二景　海の宮の廣間

幻よ、海にありて生くるもの、
そは美しき人魚の女性、
そしてまた、海をつかさどるは、
雄々しくたけき美丈夫、
幻のその姿は、昔の龍王ではないのだ、
そこにあるは、ルチフェルのごとく、
神をも支配する男性、
魔神のごとくにして、至上に生くる魂である、
光と共にまた、
暗き罪をも、闇をも持つもの、

それだ、全體の中の一つの王。

『私は見る、海に永遠のすがたを、
濁れる水を入れ、清麗の風をうかべて、
いつも正しく澄めるもの、
その大きな實在を』
海の王こそは、
かゝる實在に生きてゐる、
おゝ、海の宮の王座に位するもの、
それは巨大の全人が、
光と影とを握る姿である。

いま、王座は虚しい、

しかし幻の人魚は、王座の横に、
美しい姿を見せてゐる、
壯麗なる光りの廣間、
そこにみちてゐる大きな慈悲、
法悦の匂ひは、
海の大きな魂から湧き上つて來るのだ、
美女はうたれる、
美女は悲しい瞳を上げる、
姫は見た、さうして涙をたゝへた、
人魚よ、それが泣かないと言へるか、
海はいつも、涙だ、水だ、
海は人魚が生のために泣く、涙の集りであるのだ。

輝いてゐる廣いところ、王座、その横に姫の座。侍女多くならんでゐる。侍女の一、姫にさゝやいてゐる。

海の宮の姫

曉を門前に眠つてゐたと言ふのね、悲しい涙がながれてゐた、
さう、その美しいさみしい人を、こゝへ連れておいで、
私はその人を見たいのだよ、
戀といふものの悲しさを、私はその人の瞳(め)から見つけよう、
さうしてお前は海の王にこのことを申し上げて、
こちらに來ていたゞくがいゝのだよ。

侍女の一

私は、仰せのやうにいたしませう、
あの方の、すなほなさみしさが、姫さまの心を暗くするでせう。

（退場）

海の宮の姫

心を暗くするといふことは、
心を明るくするといふことゝり、悲しいことに違ひない、
それを經て來た、美しい女性(をんな)こそ、
海の中に永遠に生きていゝ力を持つてゐるやうな氣がする。

侍女の二、美女をみちびいて來る。美女ひざまづく。

いゝえ、いゝえ、立つて下さい、
あなたは、長く悲しい思ひをして來た、

私達はあなたを、長く待つてゐたのですよ、
さうしてあなたは、たづねられる方の、
そのおとづれを、聲を、どこかでききましたか。

美　女

いゝえ、いゝえ、それは悲しいことですの、
私は、あの人のことを知りません、
私は、海の底の砂の路を、泣きつゞけてまゐりました。

海の宮の姫

泣いて下さるな、あなたの聲は、
空の上の風のやうに、侍女達の瞳をぬらしてしまふでせう、
私は、海の王が、あなたとあなたの戀人に、

海の生きる、永遠の路をひらいて下さるやう、
お願ひしておきましたわ、
あなたの純な情熱が、海の心にひゞいて來たのです。

侍女の一（出る）

王のお出ましでございます。

海の宮の王（出座）

（姫に）そなたの話の、悲しい美しい人といふのはあの方か、
よく來られた、私は海に生きる者の、光と暗を持つ、
あなたは悲しい方だ、
私はあなたに、永遠に海に生きるしるしをあたへますよ
さみしい人よ、心を強く持ちなさい、

やがてあなたが、あなたのたづねられる人を求めた時、
私はその人も、海に生きるしるしを持つやうに、
私の言葉をあなたにあたへておく、
さうしていま、あなたは海にありて永生のものだ、
悲しみに耐へよ、光をめざして行け、
さらば、悲しきが故にこそ、
希望がそこにわき、生命がそこにあることを、考へられよ。（退場）

海の宮の姫

さらば、やがて希望のみちた時、私達はまた相逢ふでせう、
その日まで、強く心をうつて、
あなたの望みをなしとげて下さい。（退場）

侍　女

さらば、さらば、さらば、さらば。（皆退場）

侍女の二（殘る）

いま、あなたは、海に生きる美しい人魚となりました、
あなたは、苦しくさみしいでせう、
しかし希望のために、出發しなくてはなりませぬ。

美　女（立ち上る）

おゝ、私は、私は、力を得た、
さらば、私は、戀のために、愛の使者とならう、
とほく、とほく、海をわたつて行かう、

私の求めるもの、戀、戀人、光りの中にあるもの、
いまこそ、私は立ち上つて、
永遠の戀を、光を、求めるために行くのです。

金色の光美女の上に落ちる、うすものの姿に彼女は變る。しづかに幕が下りる。

幻よ、戀は全なるものの一つだ、
凡てを生かすものだ、
永遠の生命を、そこに約束するものだ、
力はそこに生れ、
光はそこに落ちる、
さうして美女は美しき戀の人魚となる、
さみしき生物よ、純情の者よ、

戀に生きるその力こそ、
海よりわき上るふしぎであるのだ、
美しき人魚よ、
戀の魚よ、
そなたの涙こそ、
戀人の生命にそゝがれて、
魔の力をも解き放つであらう。

VI 幻の死の宮

幻よ、死の島の上、
暗く輝ける廢墟のごとく、
死の宮はそゝり立つ、
低迷する妖氣の窓に、
陰鬱の黒き鳥は鳴き、
怪麗の灯の一つ、
幻のごとく搖れ動く、
時として死の宮は風にふるへ、
黒き扉はきしみ嘆き、
死怪のごとき沈默の黒影は、
地を翔りてうかゞひより、
暗き階段をふんで上り行く。

死の宮よ、それは愛慾と、
享樂の幻想にうちたてられた殿堂、
魔女のあくところのない情慾が、
そのやはらかいしとねに、
火のやうに燃えさかり、焔となる、
おゝ、黒き情痴の焔よ、
めらめらと、めらめらと、それは男を焼かずにはおかぬ、
古塔のその一室、
いまし黒影はそと耳を傾けて、
ほゝと凄麗の笑ひを洩らした、
それは魔女だ、
白い魔だ、いばらの美女だ、
彼女の爪はとがれてゐる。

がらんとした廣き部屋。黒いカアテン風に搖れる。貴公子椅子に凭つてうなだれてゐる。

貴公子（顔を上げて）

死の魔女め、嬌女（コケット）め、私はたぶらかされはしない、
私は魅せられはしない、
私は、身を以て、まもつてやる、
あゝ、だが、戀人よ、お前はどうしてゐるか、
時はすぎて來た、私はとらはれてゐる、
お前は、お前は、いまどうしてゐるか。（うなだれる）

魔女（這入つて來る）

ほほほほほほ、また嘆いてゐる、泣いてゐる、
失つた日はかへらない、失つた人は消えてしまふ、
それは吹きすぎた風のやうなものだわ、
二度とふたゝびかへつて來ないものだわ、
さあ、私はやつて來た、
あなたはなぜ、私の美しい白い肌を、
あなたの胸に、心に、きざみつけてくれないの。

貴公子

駄目だ、よしてくれ、
私は知つてゐる、私には戀してゐるものがあるのだ、
それは生きてゐるのだ、
あなたは私をだまさうとしてゐる、

だが、それは無駄だ、
あなたの汚れてゐる戀こそ、永遠の愛をはづかしめるものだ。

魔女

いゝえ、いゝえ、あなたは、戀の歡樂の、
盡きないよろこびを知らない、
私を、私を、許してごらん、
そこからよろこびの泉が湧いて來る、
あなたのために、私の身體は燃えてゐる、
火のやうな情熱が、私を燒いてゐる、
そこによろこびがあるのだ、
さあ、あなたは、私を、火のよろこびを、取るがいゝ。

貴公子

止めてくれ、いやらしいことは、
私には淸らかな戀があるのだ、
あなたがこの部屋から私をとき放つてくれゝば、
私はその戀のために、
世界中をかけめぐるだらう、
よしまた私をこゝにとらへておいたとて、
私は千年も、その戀人のために、待つことが出來るのだ。

魔女

おゝ、風よ、悍らしいこの言葉を吐く、
若い男を燒いてくれ、灰にして、世界中にまいておくれ、

いや駄目なのだ、
この人が、私に戀する心をおこさないうちは、
私の魔の力でも、
この人をどうすることも出來ないのだ、
あゝ、あなた、私は、この暗い空の下で、
千年の間あなたを呼んでゐた、
さうしていま、私の胸は少女のやうにふるへてゐるのに、
あなたは、私を許してくれない、
私は火のやうに燃えて、毎日千斗の水に身をひたしても、
それはあつく沸き上つてしまふ、
それほどに、深くあなたを戀してゐる、
私は悲しいのだ、苦しいのだ、寂しいのだ、
おう、おう、おう、私を許して下さい、

私の火のやうな戀を、あなたの胸に注がして下さい。

魔女、白い手をあげて悶える。貴公子の心すこしく動く。魔女咽び泣いて叫ぶ。

おう、おう、おう、千年の戀にすてられたら、
私は火になつて、燒け死ぬだらう、
心はつめたくなつて、凍つてしまふだらう、
おう、私は朽ち果てゝ、死ぬ、
おう、おう、おう、私は死ぬ、
私は、苦しい、さみしい、悲しい、
ねえ、私を、私を、死なせないで下さい、
私を、私を、あなたの胸に生かして下さい、
おゝ、生かして下さい。

貴　公　子（すゝみよつて）

泣くな、哭くな、苦しむな、
私も悲しくなる、あなたは戀のために、そんなに悶えてゐるのか。

魔　女（ほゝゑんで）

おゝ、やさしい方、私の心を察して下さい、
私は、私は、こんなにあなたを思つてゐる。

魔女、妖艶に貴公子の手をとる。貴公子うなだれたまゝ。

おゝ、あなた、あなた、
私の胸は、いま、こんなにときめいて來た、
ねえ、私を許してねえ、

ねえ、私を、私を、許してねえ、
私は、あなたを得たなら、千年も、あなたと戀のよろこびをたのしんで、
たとへ戀の春が來て、東の風が吹かうと、
岸の岩に立つてうたひはしない、
私は少女のやうに、あなたとこゝに坐つてゐよう、
そして永久につきない戀の、
たのしい物語にふけつて、時を忘れよう、
ねえ、あなたは美しく痩せて來たわ、
ねえ、あなたはあなたの戀を、忘れてしまふでしよ、
ねえ、私を、私を、許してねえ。

魔女、貴公子を引きよせる。なまめかしい瞬間……貴公子、ぢつと空を見つめる。す

ぐ魔女の手を引きはなして。

貴公子

えい、あなたは私を吸ひよせたな、
私は、私は、私の美しい戀人を忘れようとした、
私は、おぼれはしない、
私は、私は、あなたを拒んでやる、
さあ、行つてくれ、私には戀人があるのだ。

魔女（赫怒して）

おゝ、私を、私を、私を、拒むといふのか、
いゝえ、いゝえ、あなたは私のものだ、
千年でも、萬年でも、私は待つてゐるよ、

その憎い心が挫けて、私の戀の火に、あなたの胸が燃えるまで、
そしてあなたの美しい戀人といふのが、
もし生きて世界をうろついてゐるなら、
つめたい氷の世界にとぢこめて、惱みの夢に凍らしてやる。

貴公子

おゝ、私の戀人を、呪つたな、
行け、行つてしまへ、消え去つてしまへ。

魔女

おう、おう、おう、呪つてやる、
どこまでも呪つてやる、
私の胸は火だ、炎だ、あらしだ、

ようし、私は行く、あなたはこゝで
唉いてゐるがいゝ、泣いてゐるがいゝ。（行く）

貴　公　子（どつかりと坐る）

いゝのだ、いゝのだ、あゝ、
戀人よ、戀人よ、そなたはどこにゐる、
私は、私は、そなたの聲を
しづかにかうして待つてゐるぞ。

貴公子うなだれる。魔の戀の唄近くひゞいてとほざかる。幕しづかに下りる。

幻よ、魔女は火だ、
燃え、狂ひ、あらしを呼ぶ、

死の島に波は高まり、
波は高く彼女の身を洗ふ、
暗い雲の下、風の下、
黒髪は亂れてあらしに、くしけづられ、
白き手は高く上がる、
暗雲よ、下りて來よ、
雷よ、閃け、鳴れ、
魔の唄たかくひゞくところ、
火は戀の情熱に狂つて、
妖麗の魔女は惱むのだ。
やがて彼女は、さめざめと、
呪ひの唄に泣いてゐた、

さうしてその時、死の宮の窓に、
貴公子はさみしく立つてゐる、
男の、泣くといふことを知るか、
彼は泣いてゐるのだ、
戀の美しい女性の、
その薄命に泣いてゐるのだ、
かくしてあらしの底に、
死の島は十日十夜を荒れ、
死の雲の下に、
その幻の影はかくれてゐた。

VII さすらひの美女

幻の、海の魚こそさみしけれ、
美しい人魚は、
海の上を、とほくとほくさすらつてゐた、
さすらひよ、そは美しい女性の、
悲しみを、いや深くさみしくする、
世界は廣く、
水は果てしない、
とほく戀人を求めても、
その影は見えないのだ、
泣いて泣いて泣きつくしても、
たづね求める人はない、
波うつ朝、風吹く夕、
さすらひの美女は泣いてゐた。

『私は知つてゐる、
戀人を求めることが永遠の彷徨であることを、
戀を求むるために、
人は死をだに辭さないではないか、
戀人のためには、光を棄て、
暗い生活の底に、貧しく生きるではないか。』
幻よ、戀の美しい女よ、
泣くがいゝ、嘆くがいゝ、
けれどもうまずにたづねて行け、
人生に一人の戀人は必ずあるのだ。

第一景　南の海

幻よそこは南の國の、熱き水の上である、
熱風(サムーン)の、砂漠を越えて來るところ、
美女はさめざめと嘆いてゐた、
聲あげて呼べどこたへぬ、熱き海に、
陽(ひ)は烈火のやうに燃え狂つてゐた。

廣き海原の上、美女ひとりさみしく立つ。

人魚の美女

熱風(サムーン)よ、私の燃え狂つてゐる胸は、

あなたの熱さより、ずつとあついのだ、
ねえ、私の戀人が、
どこにゐるか、知つてゐないの。

熱風(サムーン)の聲

知りませんね、私は南の砂漠から吹いて來たが、
そのやうな姿は見かけませんでしたよ。

第二景 北の海

幻よ、そこは北の果てなる氷の海である、
水は凍り、雪は積み、風はあらく吹きすさぶ、
美女はそこに、つめたく凍る身をおいて、
嘆きに、心を吹かせてゐた、
凍れる北海の幻よ、そこにあるは死のごとき沈黙である。

廣き海原の氷の上、美女さみしく立つ。

人魚の美女

海よ、北風よ、私のたづねる人の、

影は一つもない、私のこゝろは凍り果てゝ、
あなたのつめたさよりつめたいのだ、
ねえ、私に教へておくれ、
美しい貴公子が、このほとりをさまよつてゐなかつたか。

北風の聲

うわあ、うわあ、知らぬ、知らぬ、
私はなんにも知らない、とほく吹いて行くばかりだ。

第三景　大洋にて

幻よ、そこは大洋の中央、
潮のあわだつほとりの、サツカー・シーである、
とほき潮の環流に、
そこは死のよどめる水となり、大洋の泡を集める、
美女はそのほとりをすぎる、
その時海蛇が一つ、破船の上に赤い舌を吐いてゐた。

廣き海原の上。海草海上に生ひしげつて、島のやうに見える。海蛇一つ。美女さみしく水に立つ。

人魚の美女

海蛇よ、私はお前を恐しくは思はない、
私のたづねる人がゐないのなら、お前に嚙まれて死にたいほどなのだ、
私は泣いてゐるのだよ、
さみしくて、悲しくて、泣いてゐる、
ねえ、お前が、美しい貴公子がどこにゐるか敎へてくれるなら、
私は、私は、お前に私の赤い血をのませて上げるよ。

海蛇

なるほどな、あなたは美しい、
いゝよ、もしその柔かい肌から、赤い血をわけてくれるなら、

私の知つてることだけ、きかせてやらう。

人魚の美女

おゝ、海蛇、私を噛んでおくれ、
さうして私は、すこしも早く、それをきゝたいのだよ、
ねえ、早く、私を噛んでおくれ。

海蛇

美しい人魚よ、私は噛むまいよ、
私が噛めば、毒の齒があなたの胸にさゝつて、
あなたは永久に消えてしまふのだ、
あなたのそれだけの情熱、私はそれを知つた、
私は惡魔から生まれたが、

よいことによい酬いがあることを知つてゐる、
教へてあげよう、私の知つてゐるだけを。

人魚の美女

ありがたう、海蛇よ、私はそのうれしさに泣いてゐる、
ねえ、私の戀しい人を、あなたはどこで見つけたの。

海蛇

いゝえ、私は見やあしない、
しかしその聲を、悲しい聲を、暗い海の上できいたのだよ、
果てしなくとほい海の上の、
死の島の上から、その聲はひゞいてゐた、
さうしてそこの死の宮の窓から、暗い灯（あかり）がさしてゐたが、

ねえ、私は思ふのだよ、
死の島の魔女が、あなたの戀人をとつて行つたのだ、
行つてごらん、どこか知らないが、
綠の海をはるかに、黑い海が暗く煙つてゐるところへ。

人魚の美女

おゝ、死の島の宮へ、魔女のために、
ありがたう、私は急がなくてはならない、
さよなら、いつか、私が自分のたづねる人に逢つた時、
私はあなたのために、
美しい幸福があることを祈るでせう。

幻よ、美しい人魚は急ぎ行く、

いづこへ、果て知らぬところへ、死の島へ、
おゝ、光の昏るゝ夕方、
水をけつて行きすぎる美しい女性、
その求むるものを知るか、
それは永遠の戀へ行くのだ、
果て知らぬ、暗き死の海を求めて行くのだ、
南より、北より、東より、西へ、
いづことも知らぬ、幻の死の島、
戀を求むる美女の、水をけつて行くのはそこである。

VIII

悲しき愛の唄

―死の島の岸邊にて―

幻よ、死の島の岸邊には、
白い波が泡と咲き亂れてゐた、
薄明の水に、
それは死の恨みに踊る
白骨の舞踏のごとく、
遙かなるとほき果てから、
黒き潮は流れて來て、
岩を洗ひ、岸邊にさわぐ、
水は荒れ、
人は死に、
時の流轉のみ、
そこにさみしくつゞいてゐた。

見上ぐれば、死の宮のほとり、
さみしい灯の一つが
ちらちらと燃えうごく、
それよ、いづことも果てしなければ、
人は惡夢の底に、
この風景を見るであらう、
風いたく騷ぐ時、
地の搖るゝ時、
幻の死の島より、君にひゞく、
死の戀唄の惱しさよ。
さはれ、いま黒き潮にのつて
美しき魚は來た、

水の上の暗きところ
白き肌は輝き、
悲しき涙の瞳をあぐれば、
死の島は黒い、
美女は水の上に立ち、
さめざめと泣き出でる、
その荒凉たるところに、
美しき戀人のあると思へば、
心弱き女の、まして戀人のために、
みつる涙を流すは、
さみしくもいたましいことである。
やがて彼女はひざまづいて祈る、

『おゝ、戀人がかしこに、
さみしく苦しんでゐるならば、
私のために、證(あかし)を見せて下さい』
涙は頰をながれ、
水の上に落ちて輝く、
戀の寶玉よ、
地に落ちては赤い花となり、
水に落ちては、
さみしき海の小魚となる、
戀よ戀、戀に泣かば、
うれひは海底より深いであらう。
その時、岩の上から、

突如として魔の戀の唄が、
烈しく强くひゞいた、
『おゝ魔女だ、
さう、戀の日にきこえた魔の唄だ、』
彼女はさとつた、ありし日に彼らを打つた手を、
彼女は立ち上る、
戀のためにはなにをためらはう、
美しき人魚よ、
戀は人を死なしめることがある、
彼女はいま、必死の戀に、
悲しみを棄てゝ立ち上る。

死の島の岸邊。とほい岩の上に、魔女うたつてゐる。美女しづかに水をふんで岸邊

に上る。かなり長い後。

魔女（とほく）

おゝ、私はなにをうたつてゐるのだ、
戀よ、戀人よ、私の魔の力は、いま萎えて來た、
あの人は、私を許してくれない、
私は、私は、そしてあの人がなくては、
生きてゐる甲斐もないほどさみしいのだ、
おゝ、私は、どうしたらいゝのだ、
うたつたとて、叫んだとて、
あの人は、たゞ一人を思つてゐる、
私は、あの人にとつて、戀のかけらでもないのだ、
風よ、波よ、電よ、

私を吹け、私の熱い胸をさましてくれ、
私は燃え上る、私は恨めしい、
あの人の思ふ女への妬みで、胸がわき上る、
あゝ、さうしていま私は、
その女があの人を、あの人の愛を、
うばひに來る夢を見るのだ。
私は、私は、かうして泣いてゐたらいゝのか、
いゝえ、いゝえ、私はあの人を、
私のものにしなくてはならないのだ、
えゝ、胸の底がめらめらと、狂ふわ、煮えるわ、
いまこそ、私は火の心で、
あの人の心をとかしてやる。

魔女の影消える、美女波がしらに足を洗はせる。

貴公子の聲(とほく)

私の戀人よ、緑の海を越えて來た美しい女よ、
私は、あなたを待つてゐる。
永遠に、あなたを待つてゐる、あなたはこの生にゐないのか、
あゝ、私はとらはれてゐるのだ、
愛慾のわなが、私をしめ木にかけてゐるのだ、
來ておくれ、私の心に、生きてゐるそなたのあかしを見せて、
痩せた身を、弱つた心を、強くさせておくれ。

人魚の美女

おゝ、きこえる、あの人の聲だ、

死の宮の窓に揺れる灯、あの人は立つてゐる、嘆いてゐる
あゝ、さうして魔女が
あの人を苦しめに、誘ひに、のぼつて行つた、
あの人は汚されてゐない、
だが、私はどうしたらいゝのだ、
あの人を、どうして救ひ出したらいゝのだ。

靈女の聲（とほく）

また窓に立つて嘆いてゐるのね、
魔の海は風ばかりだわよ、ねえ、私はいまやつて來たわ、
さあ、私はあなたをとらへてゐる、
私は蜘蛛の糸をあなたにかけたわよ、
ねえ、まだ、私を許してくれないの。

靈公子の聲（とほく）

默つてゐてくれ、私はお前を憎むのだ、
私はいま。なぜか、心の底に、
美しい心がひらいて來たやうに感ずるのだよ、
戀人の心が、姿が、
近くあるやうに感ずるのだ。

靈女の聲（とほく）

いゝえ、いゝえ、戀人だつて、あの美しい女だつて、
女は藻にからまれて、いま時分骨になつてゐるよ、
黑い潮にゆられて、がくがく顎を鳴らしてゐる、
あなたの待つてゐるのは、それなのね。

貴公子の聲（とほく）

うそだ、うそだ、
彼女（あれ）は生きてゐるのだ、私の心はさわいで來た、
彼女（あれ）の心は近い、彼女（あれ）はそこにゐるのだ。

魔女の聲（とほく）

ほほ、ほほ、ほほ、海はまつ黒だ、
一つの影だつて、そこにありはしない、
ねえ、私を許して下さい。
私は、あなたの戀人よりか美しいのだよ、
そして百倍の歡樂を、あなたに敎へて上げよう。

貴公子の聲（かすかに）

よせ、行つてしまへ、
私は、彼女（あれ）を待つてゐる、いゝえ、だめだ、お前の心は、
まるで毒の蟲のやうに私をさしたがる、
えゝ、行け、去れ、行つてしまへ、行つて……。（聲消える）

人魚の美女

おゝ、あの人が、魔女に、
おゝ、私は、私は、私の戀の心を、あの人に告げて、
私の明るい唄で、あの人を、
苦しみの底から救はなくてはならない。

岸邊の岩の上に立つて、波に足を洗ひながらうたふ。

美女の愛の唄（複唱）

暗い風がそよらそよら、
あなた、戀の生命よ。
　のがれて來て、
私は來たのとほい路を。

熱い涙がほろりほろり、
あなた、愛の人よ、
　歸つて來て、
私は泣いて海の上に。

青い水がきらりきらり、
あなた、光の海へ、
　行きませう、
戀よ、私は待つてゐる。

美女しづかにすゝり泣く。

貴公子の聲（かすかに）

來てくれたな、きこえる、おゝ、きこえましたよ、
戀人よ、そなたの愛の唄が、
私を　私を、この死の宮から……あゝ。

聲消える。

魔女の聲（高く）

おゝ、來たんだつて、お默り、默つておしまひ、戀の女、
そんな唄は、地獄の底で、火の山でうたふがいゝ、
やらないよ、かへしてやらないよ、
あの人は、あの人は、私のものなのだよ、
えゝ、風よ、波よ、電よ、早く來い、
女を連れて行け、死の地獄の、煮釜の中におしこめろ、
早く、早く、早く、あゝ、女よ、
ぐつぐつと釜の底で、溶けろ、消えろ、油になれ。

三つの妖魔の影あらはれる。美女をとりまく。

魔の波の精

うわあ、そこにゐるのは誰だ、
俺は迎へに來たぞ、俺は迎へに來たぞ、行け、立て、
お前は、地獄に行くのだ。

魔の風の精

ふわあ、女よ、俺も迎へに來た、
立つがいゝ、俺は親切だ、煮釜の火を、とろとろと煽いでやろ。

魔の電の精

女よ、美しい女よ、わつわつわつわつ、
お前の來たのがわるいのだ、行くがいゝ、俺は、電の光で、

地獄の路を明るくしてやるわな。

人魚の美女

おゝ、おゝ、おゝ、魔が、魔が、
あゝ、私を、私を許しておくれ、
私は愛する人を迎へに來たのだ、私は愛する人のために、
とほく、とほく、泣いて來たのだ、
許しておくれ、私を、私を、許しておくれ。

魔の波の精

うわあ、駄目、駄目だよ、
さうだつたな、お前は藻のわなからぬけ出したな、
こんどは逃がさないぞ、

つかまへろ、つかまへろ、つかまへろ。

人魚の美女（ひざまづいて泣く）

私は、私は、もうだめ、戀人よ、戀人よ、
あゝ、私の心はふるへる、恐れる、
おゝ、さうだ、さうだ、呼ばう、呼ばう、海の精を、
海の精よ、來て下さい、來て下さい、
私はとらへられる、私は、私は、とらへられる。

魔の波の精、美女をとらへる。海の精、あらはれる。

魔の波の精

うわあ、つかまへたぞ、

さあ、行け、立て、お前の行くところはきまつてゐる。

海　の　精（立ちよつて）

誰だ、誰だ、海に生きるもの、美しい人魚を、
とらへてゐるのは……。

霓の波の精（ふりかへつて）

うわあ、うわあ、うわあ、うわあ、（手をはなす）
だめだ、友達、海の精が來たわ、俺は力が萎えたわ、
俺は海の下に生きてゐるのだわ、
許してくれ、許してくれ、俺はわるいことはしないわ。（消える）

海　の　精（美女をかばつて）

波の精だつたのか、わるい奴め……
さうしてお前達は、どうしたのだ、海の美女は、
お前達になにをしたのだ。

霓の風の精

ふわあ、知らないよ、
俺は、死の島の魔女からたのまれたばかりだ、
俺にその女をわたしてくれ、
俺は、その女を地獄へ連れて行くのだ。

霓の雹の精

わつわつわつ、海の精よ、
わたしてくれ、俺はその女の地獄へ行く路をてらしてやる。

海の精

だめだ、この美しい人は、
海に生きてゐるものだ、海は私の國だ、お前達こそ、
地獄に行つて、赤い火に燒かれてしまへ。

魔の風、雹の精（消える、聲だけ）

ふわあ、だめだ、だめだ、海の上ではだめだ、
わつわつわつ、だめだ、歸らう、
ふわあ、さうして陸に來たら、空に來たら、とらへてやらう、
わつわつわつ、さうだ、それより外にないわ。

人魚の美女（ひざまづく）

おゝ、私は、私はたすかりましたわ、
でも、戀しい人は、死の宮の中で、あゝ、死の宮の火が搖れる、
烈しく烈しく搖れて、消えた、消えてしまつた、
戀人を、海の精よ、戀人を、戀人を。

海の精（しづかに）

おゝ、灯が消えたな、
だが、だが、海の上のことは、私達の力に及ばない、
泣け、泣くがいゝ、さうして呼べ、
戀人を呼べ、海のほとりに呼べ、私はその時を待つてゐる。（消える）

美女立ち上る、それから泣きながら愛の唄をうたふ。

魔女の聲（とほく唄にまじつて）

えゝ、だめだつたのか、いゝえ。いゝんだよ、
おうたひ、いくらでもおうたひ、お前の戀人は、私の手にあるのだ、
やるものか、返してやるものか、
いまに、きつと私の惡の火で、お前の戀人の胸をとかしてやる、
海の上のことは、ねえ、お前達の力には及ばないんだよ、
ほほ、ほほ、ほほ、ほほほほほほほ……。（幕下りる）

幻よ、死の島の岸邊、
天暗く、風はさみしく吹き、
波は岩を洗つて吼える、
その時きこゆるもの、

美女の悲しくうたふ「愛の唄」、
唄に落つるは涙ばかりか、
おゝ、それよ、戀の血も落ちて、
水を染め、心を染める、
悲しくも空にひゞいて、
虚しく海の上に唄は歸り、
美女は永遠に泣いてゐる。

永遠よ、かくて戀は、
果てしなく消え行くのか、
その時とほく、ほの白く、
光は海の上をわたつて來るのだ、
果てしない、かすかの果てを、

幻の光は來るのだ、
それは戀の思想であり、
純情の魂が呼ぶ心である、
あゝ、愛の唄の、
悲しくひゞくところ、
海は次第に荒れて來る。

IX 幻の海の戀

——戀の波うつところ——

第一景　暗き海の上

幻よ、美女の戀、
そは永遠に海の持つ戀である、
――海を女性と見よ、
廣く、深く、さみしく、
海はとほい悲しい戀を持つてゐる、
海を男性と見よ、
荒ぶる波、吹く風、
岩を嚙んで高く上がるしぶき、
海は怒れる海を持つてゐる、
おゝ、廣き海原よ、

その戀こそ、
人々の心を誘つて、
永遠の夢にみちびくのである。

『君よ、きゝたまへ、
私は海に泳いでゐた、
綠の水がやさしく私の肌をなぶる、
私は快よい夢に、
身を沈めさうになつてしまふ、』
その時、海はうたつてゐる、
光の水の上に、
やさしい戀のセレナーデがきこえ、
黄昏はまた、さみしい波の聲が、

岩をあらつてきこえる、
悲しく涙ぐましくきこえる。

おゝ、美しい魚のうたふ愛の唄、
それは悲しくやるせなくきこえるのだ、
泣いて泣いて水の上にうたへば、
それは水底にひゞいて行く、
さうしてまた、幻よ、とほき海の底の宮にまで、
それがかなしくひゞくと思へ、
さうしてその時また、その聲は、
空にひゞいて光を呼ぶと思へ、
海の宮の人魚は、
さうして猛き王はその聲に立ち上る、

空の上の陽は、
明るくその聲をめざしてくる。

死の島をはなれた海の上。美女水の上にひざまづいてうたつてゐる、悲しい涙の聲。
魔の戀の唄それにまじつてきこえる。光どこからかうすくとほくさして來る。

海の宮の姫（出る）

おゝ、嘆いてゐる、泣いてゐる、うたつてゐる、
おゝ、あなたの唄は、私の心をも悲しくする、
さあ、お立ち、私達が來ましたよ、
嘆きを止めていゝ、私達が來たのです。

人魚の美女（立ち上る）

おゝ、姫さま、姫さま、私は悲しい、
きいて下さい、魔女がうたつてゐる、私の戀人は、あの死の宮から、
さみしい聲で私を呼んでゐたけど、
もう、もう、聲も、聲も、きこえなくなりました。

海の精（出る）

おゝ、美しい海の女よ、永遠があの人を守つてゐる、
海の永遠が、あなたの戀人を守つてゐる、
嘆くな、悲しむな、あなたのために、海はあの人を守るのだ。

人魚の美女

おゝ、どうぞ、どうぞ、あの人を、
早く、魔女の手から救つて下さい、魔女は戀の唄をうたつて、

私の戀人を、愛慾の犠牲にしようとしてゐるのですよ。

海の王（侍女達と共に出る）

はははははは、悲しまないでいゝのだ、
私がいま、呼んでやる、死の島の女から、あなたの戀人を、
かへしてもらつて上げる、
海の精よ、呼べ、魔の女を呼べ、
私は彼女に言ふことがあるのだ。

海の精（高く）

おうい、魔の女よ、出て來い、
海の王が、お前のために來たのだ、さうしてお前のために、
また戀人を求めてゐる美しい女のために、

お前に言ふことがあるのだ。

魔女幻のごとく岩頭に立つ、悲壮なる姿……波荒く、風强くなる。

魔　女

私を呼んだのは誰だい、海の王だつて、
ほほ、ほほ、海の王よ、あなたは私を戀して來たのか、
あの若い貴公子のかはりに、
あなたが、なつてくれるといふのか。

海の王

おゝ、魔の女よ、默るがいゝ、
お前は戀に飢ゑてゐる、しかしこゝにゐる美しい女と、

お前がとらへてゐる美しい男との、
その戀は千年の前から約束されてゐたものだ、
それこそ、全なるものの一つとして、
世界と共に定まつてゐたものなのだ、
お前のよこしまをつゝしむがいゝ、
さうしてその人をかへすがいゝ、
それがお前の、新しい生命の門出になるだらう。

魔　女

ほほ、ほほ、ほほ、ほほ、お默り、海の王よ、
あなたが海をつかさどるものなら、
私は愛慾の、戀と匂ひに生きてゐるものだ、
私は、魔の海の、戀の魔女なのだ、

あなたのその強い身體が、あの人に代らうとも、
私はあの人をはなしはしない、
あの人は、私の、私のものなのだよ、
ねえ、あなたの力は強いだらう、
しかしそれは海だけのものだよ、
私には魔の力がある、
空の上には私の魔の僕(しもべ)があるのだ、
私の力を、見せて上げよう、
風よ、吹き起れ、電よ、はためけ、空の上の力を、
海のものに、見せてやれ。

魔女消える。魔の戀の唄たかく、風の音強く、電雷閃く。

海の王

おゝ、愚かな魔の女よ、
お前の力は小さい、
それは海洋の中の孤島の外にはのびないものだ。

海の宮の姫

あゝ、強い魔の女の呪ひ、
美しい女の戀する人はどうなるでせう、
王よ、王よ、それはどうなるのでせう。

人魚の美女

おゝ、私はどうしたらいゝのだ、

戀人はどうなるのだ、
あゝ、私の胸は破れてしまふ、破れてくだけてしまふ。

海の王

嘆くな、悲しむな、
海の、大きな力を信ずるがいゝ、私の力は大きい、
私は、自分を信じてゐる、
美しい女よ、愛の唄をうたへ、
魔の風と、電に耐へてうたへ、
姫よ、侍女よ、魔の戀の唄を、あらしの中から消してしまへ、
海は愛だ、
力だ、美だ、光りだ、大きなものだ。

（美女、姫、侍女みな愛の唄を合唱する。魔の戀の唄それにまじる。）

さうだ、うたへ、聲のかぎりを、
みな、うたへ、私を信じてうたへ、
風を耐へ、あらしを耐へ、電を耐へてうたへ、時はすぐ來るのだ、
おゝ、海の精よ、水の底に行け、
波を呼べ、大波を呼べ、死の島を蔽つてしまへ、
死の宮を碎いてしまへ、
美しい女の戀人を、水の底にくゞつて連れて來い。

光の聲（とほく）

私は光りだ、輝くものだ、
魔の海の上の暗い雲を、私の力で追つてやらう、

愛の唄のひゞきに、私はやつて來た、
美しい戀のために、光をあたへるために、私はやつて來たのだ、
おゝ、さうして私の來たのは、おそくはない筈だ、
私は光りだ、私の來たのはおそくはない筈だ。

海の王

おゝ、光りの聲だ、おそくはない、少しもおそくはない、
だが、いま暗い雲と、魔の風と、雹とを、
私がつかふのだ、私の力に加勢させるのだ、
光よ、待つてくれ、私の大波が死の島を蔽つて、
あらしと凪としづまるまで……」

おゝ、闇こそは一切をつゝむもの、

咲きほこる無限の花であるのだ、
さうしてあらゆる一切は、
その暗きところを越え、
苦しみ、悩み、あらしを越えて、
光明の岸に達するのだ。

『君よ、きゝたまへ、
人生は遂にこの闇の過程であることを、
これは路だ、彼岸ではないのだ、
故に闇こそ人生であり、
その大いなるものが輝くのだ、
偉大なものに、
暗きものを負はざるものあるか、』

おゝ、幻の闇よ、來りてこゝに生きよ、
來りて薄明に悲しむものを救へ、
それだ、新しき力を、
大きく若く生ませるのは……。

光の聲

待たう、待つてゐよう、私はそのあとで、
戀する二人のために、花環を送らう、光の花を送らう、
私は光りだ、待つてゐる、待つてゐる、待つてゐるぞ。

海の王と海の精消える。愛の唄たかく、魔の戀の唄また高く、あらしの音、電閃、
波高くおこる。幕下りる。

幻よ、一切を越えて輝くものは
光であると思ふな、
光は暗いところに生まれて來る、
暗は主で、光は從者だ、
そこに見よ、いま光の前に、
たしかに大きな闇が擴がることを、
幻よ、海よ、波よ、
かくて暗き大いなる力こそ、
その手の持つ使命であるのだ、
海の戀は廣い、
海の戀は荒く烈しい、
いまとほくその前兆の
鬱々たる闇は海の上に擴がる、

油うく黒い海の底、
沸々としてたぎるもの。
聲なき聲のはらむもの、
誰か知らう、
海が大きな煮釜であることを。

第二景　死の島

とほく黒き死の島の陰影。黒き水の上、魔の戀の唄、愛の唄、たかくひゞく。あらしの聲共に。

幻よ、そは一つの
黒き海の上に漂ふ死の島である、
寂寥はその影を、
死のごとくつゝみ、
風あらくすさみ、
波あらく咽ぶ、
いづくともなく黒き島は翔けり、

いづくともなく死の匂ひ漂ふ、
あゝ、幻の死の島よ、
とほくそこによするもの、
白く來るもの、
烈しく大洋を翔けり來るもの、
そは海の上の丘である。
高き、あれ狂ふ、大波の山である。

幻の狂瀾よ、
よするとき、波の手はひらめき、
一つ、岸邊の岩を嚙み、
二つ、岸邊の斷崖にせまり、
三つ、斷崖の上にさかのぼる、

やがて見よ、
潮はどうと高く崩れて、
幻の死の島に注ぐ、
かくして海原は遂に島の影を呑み、
水は廣く、
海原はとほく、
幻よ、いまは死の島はほろびて、
海の底に沈み果てた。

第三景　砕けたる死の島

海上はなめらか、死の島の影とほく、薄明……死の島の宮は崩れてなく、その姿は荒れてゐる。

幻よ、長き後のことである、
水は荒く引き去り、
風は消え、
あらしは去つた、
さうして黒き海の上に、
死の島は夢のごとく浮んだ、
さはれ、幻よ、

そは消え果つるもの、
死の島は荒れて、
死の宮はほろびた、
残骸の水の上にのこるもの、
そはたゞ夢であつた、
そはたゞ魔女の、
光なき夢であつたのだ。

X 幻の戀・海の戀

第一景 幻の戀

幻よ、そこは光の水の上である、
緑の潮しづかに流るゝところ、
光の花輪は高く高くめぐつてゐる、
あたゝかき風は、
戀の果てしないよろこびを送り、
水はぬるみ、
やはらかに白き足を洗ふ、
あゝ、戀よ戀、
長き果てしなき海の戀、
永遠の戀はながれよる藻草の。

よるべないごとく果てしもなく、
海の上にぞ、
輝きわたり、燃え上る。

見よ、いまそこ越えて、
はるかの戀の行手を急ぐ、
愛の幻影の二つ、
相語らひ、相擁して、
彼らの語るものはなにであらう。
水よ、きけ、彼らの祕語を、
風よ、しづかに耳すませ、
熱き胸の呼吸をきいてくれ、
いづこへ行くか、知らぬ、

さはれ、戀ならば、
永遠に、熱き戀ならば、
いづこの果てと問ふべきであらうか、
たゞよろこびのさゝやきが、
熱い魂を燃えしめるだけである。

貴公子、美女水の上に立つ。

人魚の貴公子

果てしないあたゝかい水ですね、
私達は幸福です、不幸を越えて來て、
永遠の戀が行手に輝いてる、
あゝ、ふりかへつてごらんなさい、

ほろび去つた死の島が見える、
ねえ、私達はもう永遠にあの島を見ないでせう、
或はまた、私達が、
再びあの島を見る時、
死の名は變つて、一生の島となつてゐるかも知れませぬよ。

人魚の美女

さう、さみしい死の島の影、
私達は苦しみましたね、
いまになれば、あの島影もなつかしい戀の思出の一つ、
私はあの時の悲しさを思ふと、
涙が、いまもわいて來ますわ。

人魚の貴公子

さうであらう、さうであらう、
私があなたの手をとつた時、
あなたの白い手はつめたくあれてゐた、
思出よ、それは悲しいけど、
いまの身には幸福の幻を畫いて來る、
ねえ、一切は夢でしたよ、
失つた日を思つてもかへらない、
私達の戀こそは、
水の上で最も美しい一つです、
私達は、その幸福の行手に急いで。
光りの中を語つて行く、

これが悲しい戀からの、
ぬけて來たよろこびの一つです。

人魚の美女

おゝ、さらば、死の島よ、
私は行く、私達は手をとりあつて行く、
果て知らぬとほい日に、
また思出の影を思ふこともあらう、
しかしいまはお別れです、
さうして苦しみにも悲しみにも、私達は別れて行く。

人魚の貴公子

さらば、死の島の影よ、

苦しい戀の思出をおいて私達は別れて行くよ、さらば

幻よ、彼らは去つて行く、
綠の海の波をけつて急ぐもの、
純麗なる戀よ、
佳麗の男よ、美女よ、
海にある美しい魚の、
その幸福の幻こそ、
光と共に輝きわたつてゐる、
高くほがらかに行け、
幻の戀の二人よ、美しく行け、
さらば、光の戀人よ、
永遠の戀に、たのしく生きよ。

第二景　死の戀

幻よ、死の島の岸邊、
荒れすさむ風に吹かれて岩頭に立てるもの、
永遠の戀を失へる魔女である、
呪もない、消え果てた、
波は悲しくうち、
風はさみしく鳴り、
死の惱みが悲しく胸にわく、
魔の力やるせなく失せて、
いたづらに嘆けば、
涙はさみしく落ち落つる。

胸をうつて悲しめば、
風の聲身にしみ、
薄明の底より來る岸邊の聲、
戀に呪はれし幾千の白骨の、
か、か、カクカクと鳴る音、
死の魔は、いまぞ彼女に來た、
嘗て幾千の魂に、
自らあたへし死の呪ひが、
いまは身に沈み、
心をのたうちまはるその寂寥。

とほく果てしなく望めば、

雲はわれ、雲は開けて二つの幻を見せる、
おゝ、光りの中を、
水の上を、波をけつて行く幻影、
戀のよろこびに、
二つの影は走つて行く、
あゝ、魔女の熱き涙は降りそゝぎ、
水の上に落ちて煮えし水玉となり、
白き手を上げて呼べど、
幻はとくすぎ去つて答へぬ、
とくすぎ去つて消え果てゝしまつた。

魔女、悄然と岩頭に立つ。

魔女

あゝ、私はさみしく衰へたわ、
大波が來て、永遠の私の戀人をつれて行つたわ、
私は、悲しくやるせなく泣いてゐる、
私の、力は盡き果て、
胸はさみしく凍つて來た、
戀人よ、あなたはなぜ私を許してくれなかつた、
おゝ、嘆いても歸らない日よ、
私は狂つてゐたか、死んでゐたか、
あゝ、私の力はどうしたのだ、
風を呼び、あらしを呼んだ力はどうしたのだ、
戀人よ、歸つて來てくれ、私の戀人よ、おゝ、
あゝ、だめ、だめになつた、
凡てが水の泡のやうに消えてしまつた、

私は、私は、どうしたらいゝのだ。

　　かすかなる光、とほく雲われる、戀の幻影二つ見える。魔女おどろいて見つめる。

おゝ、おゝ、おゝ、二人だ、美しい人と女だ、
水をけたてゝ行く、行く、行く、
行つてしまふ、とほく行つてしまふ、
おう、おう、待つて、待つて、私は苦しい、私はさみしい、戀人よ、
おゝ、白い顏がふり返つた、
白い手が、白い手が、こちらをさした、
戀人、戀人、戀人、私の千年に一つの戀、
あゝ、だめだ、また行つてしまふ、ま　行つてしまふ、

かすんで行く、光の中に消えて行く、
戀人よ、あゝ、
もう見えない、見えない、
だめ、だめ、だめ、みんな終つた、
私は、私は、私は、私は死ぬ。

魔女、岩頭より岸邊に落ちる。しづかな夕の氣配……光あはく魔女の死の上にる……からからと死せる白骨の笑ふ聲がする。幕。

幻よ、死の島の岸邊に、
白骨の死の笑ひが、
か、か、からからとさみしくひゞいて來た、
からからと、幾千の聲、

その時、魔女は死の岸の、
水に近くよこたはつて、
永遠の夢を見てゐるのだ、
呪はれたる者の、
永遠の死がこれである。

おゝ、その凄麗の顔、
白い美しい手、やはらかい肌、
愛慾の匂ひは、
その時、死の氣を越え、
情慾の波はしづかに肌をまく、
水よ、それすらも、
長く千年を妖麗の美に、

魅せられてゐたかも知れぬのだ。
あゝ、かくして波のしづかに、
岸邊を洗ふあたり、
黒髮は長く長く、
藻のやうにゆらいでゐる、
ゆらゆらと搖れ、
さやさやと鳴ればきこえる愛慾の、
血のどよめき、水の聲、
おゝ、黒髮よ、搖れよ、
そは千人の戀の犧牲の果てに、
自らを捧げたる魔女の、
永遠の淨化を呼ぶ姿であるのだ。

「祈りの魔女」の岩の話

（エピローグ・敍事詩）

一

幻よ、死の島の魔女の死から、
長い、長い、年月が經つてゐた、
島の上に煙が上がり、
陽はいつかその上に輝き、
凪あたゝかに、水は清く澄みわたり、
麥畑に雲雀の聲がする、
凪の下、そこに家があり、
牝牛はやはらかい眼を見はり、
子供は嬉々として丘の上に走つた、
花の散つたあとの櫻は、

青葉をさらさらと鳴らしてゐる、
丘を下ればたんぽぽ、れんげ、
小路の草は青く、
すみれの花はのぞき、
わすれなぐさは草の蔭に、
小さくしをらしく坐つてゐる、
島に來た旅人が、
その小路を下つて、
小さな家の蔭に出る。

それから家下に立つてゐる老父に、
魔女の岩の行手をたづねる
『どう行くんだね、おぢいさん、』

老父は眉をひそめた、
さうしてさみしく呟いた、
『およしなせえ、若いお方、
魔女の岩には魂がある、
いまも若い美しい男を見ると、
長い髪がゆらゆらとうごいて、
水の底から瞳がのぞく……。』

『ねえ、およしなせえ、
その瞳の美しさに、
み入られたらおしまひだ、
波の底から白い手がまねく、
その手は若い男の、

胸の底をかき亂す、
ねえ、さうして若い男は、
ふらふらと波の底に落ちるのだ。』
『ありがたう、しかし私は、
その美しい瞳を見たいのだ。』
若い旅人は、
うとましくも呟いた。

二

波うつ磯邊を越えれば、
岩たかくそびゆる下、
水は黒く、波は白く碎ける、
若い旅人のみつめるところ、

魔女はそこによこたはる、
岩をめぐれば、
風さみしく吼えて言ふ、
『おいで、私の胸に、
私はあなたを待つてゐた、
戀しい人よ、
私をあたゝかく抱いとくれ。』

若い旅人は見つめた、
岩よ、魔女よ、さやさやと、
黒髪の搖れる音がする、
白き顏赤い唇、
長く伸びたましろい手、

波はさゝやいて言ふのだ、
『若い男よ、
そなたは私の戀人、
私はまだ、若い生命に飢ゑてゐる、
強く、私を抱いておくれ。』

若い旅人はしづかに、
さみしい瞳を上げてうなづいた、
『私を誘ふものよ、
私はさみしいものだ、
私は戀に、
この身をすてられて來た、
さうして死をえらんで、

あなたをたづねて來た、
私は死ぬ、
あなたも死んだ。』
『ねえ、私の話を、
私のさみしい話をきいとくれ、
私はそれを話してから、
あなたに抱かれて死んで行かう。』
幻よ、魔女は美しく立ち上る、
『きかうよ、若い人、
私は戀に飢ゑてゐる、
若い生命の戀なら、
私の魂をうづかせて、

愛慾の血が燃えるだらう。』

三

『私は田舎で生まれた、
私は自分の路を、文學にえらんだ、
ねえ、それは都會への、
若いあこがれから育つたのだ、
きいて下さい、
私の戀の巡禮はそれからはじまる、
十七の時でした、
私は田舎から東京へ出て、
とほい親戚に身をおいた、
伯父と若い伯母とその娘と、

娘は十五でしたよ、』

『私の夢は、文學の、
若い友達からはじまつた、
それらは言ふ、
「君の家の娘は美しい、」
私は心に、
娘を戀してゐましたよ、
しかし若い伯母もまた、
美しい姿を持つてゐたのです、
さうして伯父は、
私の十八の時に死にました。』

『伯母は私に泣いて言ふのです、
「私の家にゐて下さい、
私達は、あなたを、
ほんとに、たのみにしてゐます、」
私はうなづきました、
それから私は、娘と、
時々熱い手をにぎつて、
純な戀に生きたのです、
おゝ、可愛いゝ子、
私は彼女を愛したのです。』

幻の魔女は聲をあげて笑つた、
『ほゝ、ほゝ、それが戀、

戀はいつだつて、歡樂に生きるのだよ、
それは戀ではない、
若い時の夢だらう、』
『さう、さうかも知れない、
だが、私達のその夢は、
つきないたのしいものでしたよ、
伯母にかくれて、
二人の手だけ合ふ、
たまたまの機會に、二人は、
たゞ默つて熱くなつて坐つてゐた。』

四

『私はなぜかその娘の、

肌の匂ひが好きでした、
甘い少女の香、
あゝ、私はやつぱり女の、
肉情が欲しかつたに相違ないのです、
その年の冬でした、
風の吹く寒い晩、
娘は早くねましたが、
伯母は起きてゐたのです。』

『その夜から、私は、
戀の地獄に落ちました、
あゝ、その苦しみを誰が知りませうか、
私の情慾は、戀人の母に、

おぼれてしまつたのでした、
私は泣きました、
しかもそれでも私の、
熱い情痴は醉つてゐたのです、
娘はそれを知りましたよ、
さうして熱い涙をながして、
泣いて泣いて泣きましたが。』

「あゝ、私は馬鹿でした、
娘はその翌日、
行方知れずになつたのです、
それをはふつて、
私は伯母と一所にゐたのです、

私は、心に、
魂の戀を忘れて、
愛慾に醉つたまゝ、
三年をすごしてゐたのです。』

『三年の後、
ふとしたことで伯母は死ぬ、
それから私は、
放埒の子となつて、
わるい遊びに、
日々をすごしてゐましたが、
二年の後、この春のことでしたよ、
私が　私が、あるカフエーに、

美しいあの娘を見出して、
魂をゆり動かされる程の、
おどろきとよろこびをおぼえたのは。』

五

『娘は私をすげなく、
辛くしましたが、
私は戀の魂を感じたのですよ、
さうして言ひました、
「私の戀をうけてくれ、」
しかし娘は言つたのです、
「いゝえ、いゝえ、私の心は、
もう一生、誰のものでもない、

私は死にました、
私はあなたを知りませぬ、」と、
さみしくうつむいたのでした。』

『私の心は波うち、
私のあこがれは火のやうでした、
魂の昔の戀の思出が、
私の身を燒いて來たのです、
しかし私は竟に、
自分のほろびるのを見ましたよ、
娘は、それからすぐに、
自分を戀する年老いた男に、
身をまかせてしまつたのです」』

『娘の言葉は、
私の心をうちました、
「私達は互に、
もう滅びたのですよ、
あなたはあなたの行くところに、
自分で行つて下さいね、
私は、私の行く路を、
私でえらんで來たのです、」
あゝ、私の魂の傷手(いたで)は、
そこから湧いて來たのです。』

六

『ねえ、私はいま、
自分の一生の暗い果てを見る、
味氣ない自分の、
悲しい一生を見る、
さうして私は死を選んで、
幻のあなたをしたつて來た、』
若い旅人は泣いてゐた、
さうしてその身はさみしく、
風の中にふるへてゐた。

幻の魔女はうつむいた、
なぜかその時、
彼女の顔にさみしい色があつた、

それから彼女はさゝやいた、
彼女の白い頬に、
ほのかに赤い色がさしてゐた。
『あなたは、さみしいのね、
私は、私の戀よりか、
そのさみしい戀に、
たかい聲をきいたやうな氣がする。
あなたは私のところに來たことを、
悔いてゐはしないの。』

『いゝえ、いゝえ、
私は少しも悔いてゐない。
もし私が悔いるなら、

一瞬の歡樂のために、
永遠の戀をすてたことですよ、
さうして純情の少女を、
汚辱の底につき入れたことです、』
若い旅人の聲は、
なにか烈しく、
魔女の胸にひゞいて來た。

『さう、わかつたのだ、
あなたは歸るがいゝ、
私はなぜか、あなたを、
私の汚辱の底におぼらすことが、
出來ないやうな氣がする』

幻の魔女はさう叫んで、
ほゝと高らかに笑つた、
その時、風が、
高く岩の上に鳴りわたつて、
波が白く高まつて來た。

七

魔女は高らかに叫んだ、
『お歸り、若い人、
私はいま、戀の話の、
心をうつものを感じた、
私はあなたを私の死の上に、
呼びたくない、

早く歸つたがいゝのだよ、』
『いゝえ、私の幻よ、
消えてはならない、
私は、幻の戀の果ての死を、
あなたの手でとりたいのだ、』
若い旅人も高らかに叫んだ。

『私は汚辱の底から、
魔の魅惑をたづねて來た、
私の果てるところは、
こゝより外にない、
さあ、私を、私を抱いとくれ、』
若い心は强かつた。

幻の魔女はしづかにさゝやいた、
『さう、それもいゝ
あなたは、こゝに汚辱の戀の、
長い骸を止め得るか。』

『ねえ、それならば私は、
あなたの戀を抱かう。
私はいまぞ知つた、
私こそ、こゝに汚辱の戀の、
長いあかしを止めてゐることを、
さうして私があなたを抱く時、
戀の死の石は二つになる、
若い男よ、

それをあなたは許し得るか、』
『おゝ、それこそ望むところだ』
若い旅人はうち叫ぶと、
幻の魔女の手を取つた。

『さらば、若き男よ、』
『さらば、戀を失へる幻の魔女よ、』
二つの腕は互を抱いた、
とほく大洋の風が、
高く烈しく吹き荒れて、
波は荒れ、
白く碎けて岩を洗ふ、
その時忽然と、幻は消えて、

幻の魔女の岩は、
祈りの姿にかはり、
うなだれた若き男の岩が、
その影によりそつてゐた。

八

幻よ、二つの岩は、
いまもある、人の心の岸に、
生命の岸邊に、
愛慾のすぎたる心の蔭に……。
波うつてその岩を洗ふところ、
それは永遠の淨罪であり、
風吹きて、岩を削るところ、

それは久遠の贖罪である、
そこにこそ、呪は消え、
たゞ一つ、戀の祈りの、
いたましく心をうつばかり。

日々にその岩のほとりに、
純白の鷗はとび、
光はとほく來て、
さみしく岩の魔女と岩の人に輝く、
夜々はまた、星々の、
はるかなるあはき光が、
青くさみしくそのほとりに落ちる、
航海する舟の上、

水夫は人に示していふ。
『あれは「祈りの魔女」
戀に幾多の魂をほろぼして、
自らも戀に失せた、
そして男岩は、
戀を汚辱した後に來た、
それは「悔い男」
二つを名づけて戀の岩といふ、
長い物語を持つものです。』
おゝ、その幻の物語の、
純麗の戀は、永遠に海の底に生き、

愛慾のものは岩と化した、
幻よ、幻のその物語よ、
いづくにもあれ、
戀こそは美しく、
また悲しき人の生の、
長き長き物語であるのだ、
海は深く青くそれを語る、
さうして波と風とが、その戀の物語を、
永遠に人の胸にうち鳴らすであらう。

跋・この作に就いて

この幻想の主題（テーマ）「死の島」は私の戀の地獄からかもし出された。それはいまから八年程前のことである。私達が「民衆」といふ小雜誌にたてこもつて詩の運動をつゞけてゐた頃である。

私は地獄の中にゐたのだ。

或日私はベックリンの「死の島」を見た。それを自分に結びつけた。それから長い間、その幻影（イリウジョン）が私の胸の中で少しづゝ育つて來たのである。

私はこんどその主題（テーマ）をまとめるに就いて新しい形式によつた。これは詩劇でもないし、敍事詩でもない。唯私自身の力を現すにふさはしい表現として、自分の力の行くところ、幻想の湧くがまゝに任せたのである。

この力を得たのは、一面、「生命」同人の八幡關太郎氏、長沼重隆氏、白

井四郎氏、小島健三氏、工藤恒氏、阿部志郎氏などの鼓舞によるところが多い。さうしてまた私の幻想を更に大きく正確にしたのには池田義信氏の助言があづかつてゐる。

此作は少くとも私の一生を通じての、最も力をこめた一つであると自分でも信ずる。今までの敍事詩と詩劇で鍛へたものを一つにしたものである。

この作は前にあげた池田氏の手によつて、松竹から映畫化されて出る筈だ。そのために私もこの作の完成を幾らか急いだ。しかし私の力は十分こめたつもりである。

なほこの作は幻想詩劇と名づけたが、舞臺上の上演の約束は凡て無視した。自由な自分の幻想を書くために、私はそれらの範圍を越えずにゐられなかつたのである。

一九二五年三月十二日夜

著者

大正十四年六月一日印刷
大正十四年六月五日發行
（定價壹圓四拾錢）

死の島の美女

著作者　福田正夫

發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話牛込　八〇六番　八〇七番　八〇八番　八〇九番

振替（東京）一七四二番

印刷所　東京市小石川區西江戸川町　電話小石川五九二番　富士印刷株式會社
印刷者　佐々木俊一

■長篇叙事詩■

〔1〕高原の處女（價八拾錢 送料六錢） 福田正夫氏作

文壇最初の試みたる「長篇叙事詩」の第一作である。一人の美しい處女の美くしい戀を主題として、永遠の人生を歌へるもの。小説の面白味と、詩の面白味とを兼れ備へた此篇は、若き人々の熱烈なる愛誦を受けてゐる。

〔2〕戀の彷徨者（價壹圓 送料六錢） 福田正夫氏作

辱かしめられた少女の胎に、汚辱の象徴として生れ出た一青年が、特殊部落民たる呪ひに虐げられ、遂に悪魔となつて、父を殺し戀人を殺すに到る運命悲劇――詩の曲節に、小説的興感を托して、朗々誦す可き名曲である。

〔3〕嘆きの孔雀（價九拾錢 送料六錢） 福田正夫氏作

舞踊の天才たる絶世の美人が、失戀の悲しみに胸破れ、遂にオフェリアの如く舞臺に狂するの始末を歌ふ。狂瀾の如きリズムは、華麗の詞句を驅つて、一曲悲戀の歌、まさにバイロンの面影を偲ばしむるであらう。

〔4〕筑波の白百合（價壹圓 送料六錢） 福田正夫氏作

筑波の邊りに白百合の如く咲き出でたる豊麗の美妓の悲しき半生を歌へるもの。彼女は如何にして魂を汚されしか。如何にして清き戀に生きしか。詩と物語と相待つての興味に、更に事實としての内容を具へてゐる、

現代詩人叢書

一巻約百六十頁の間に、各著者の代表作品を網羅したもので、創刊以來飛ぶが如き賣行である。價僅に六拾錢、瀟洒たる體裁の美本である。

(1) 沈默の血汐 野口米次郎
(2) 蠟人形 西條八十
(3) 預言 川路柳虹
(4) 田舍の花 室生犀星
(5) 季節の馬車 佐藤惣之助
(6) 青き樹かげ 三木露風
(7) 炎天 千家元麿
(8) 澄める青空 生田春月
(9) 風車 百田宗治
(10) 古風な月 日夏耿之介
(11) 愛慕 白鳥省吾
(12) 沙上の夢 野口雨情
(13) 遠き薔薇 堀口大學
(14) 蝶を夢む 萩原朔太郎
(15) 耕人の手 福田正夫
(16) 世界の民衆に 正富汪洋
(17) 斑猫 深尾須磨子
(18) 西歐を行く 大藤治郎

以下續々刊行

菊半截紙装◎一冊六拾錢◎送料四錢

詩話會 川路柳虹氏 白鳥省吾氏 福田正夫氏 編

明治大正詩選

（忽ち七版）

菊大判特別製
四百三十頁
價貳圓八拾錢
郵送料拾八錢

古典的名著――不朽の大詩集出づ

作家は八十四人。一人毎に肖像と小傳とを附せり

謂ゆる新體詩の創始時代より、現在に至る迄の代表的詩人の代表作を選抄し、これを年代順に排列して、明治大正の詩壇の全景を一眸の下にあつめたもので、その規模とその實質に於いて、實に出版界空前の一大詩集である。これが編纂に當つては、既に堙滅せる稀覯書をも尋ねて、詩集を閲みする二百有餘册。嚴正なる批判と周到なる選擇とによつて、古典的名篇を蒐めたもので、作者は八十四人、作品は二百七十篇。一人毎に肖像を掲げ小傳を附し、卷末には五十年に亙れる精到の『年表』と、詳密を極めた『詩書一覽』とあり、明治大正の詩壇の精華は、全くこの一册のうちに盡きる。これ實に過去を標する不朽の金字塔であり、同時に、未來の詩壇を導く燈明臺である。苟くも詩に志ある人にとつて必需の寶卷であることは、云ふまでもない。

年刊集

日本詩集

第七集新刊

詩話會編

詩話會によつて『日本詩集』の創刊されたのは、一九一九年である。爾年毎年一回刊行を繼續し來つてこゝに第七集一九二五年版は公にされた。本集には、五十五詩人の最も自信ある作品を掲ぐるの外、一ケ年に亙れる詩壇の重要事項を網羅してある。

		價	送料
第一集	一九一九年版	一、五〇	〇八
第二集	一九二〇年版	一、八〇	、一〇
第三集	一九二一年版	一、六〇	、一〇
第四集	一九二二年版	一、六〇	、一〇
第五集	一九二三年版	一、八〇	、一〇
第六集	一九二四年版	一、八〇	、一〇
第七集	一六二五年版	一、八〇	、一〇

年刊

日本童謠集 第一集

童謠詩人會編

今回新たに「童謠詩人會」は組織され、年刊童謠集を公にすることゝなつた。編纂委員は、北原白秋、川路柳虹、西條八十、白鳥省吾、竹久夢二、野口雨情、三木露風の八氏。童謠詩人二十四氏の近作を集めた。（總布特製、價貳圓、送料拾貳錢）

新潮社の詩集

西條八十童謠全集	定價 二、五〇	送料 、一六	西條八十著
赤き獵衣（小曲集）	一、四〇	、〇八	西條八十著
共生の旗	一、三〇	、〇八	白鳥省吾著
華かな散歩	一、五〇	、〇八	佐藤惣之助著
こがね蟲	一、五〇	、〇八	金子光晴著
山上に立つ	一、三〇	、〇六	野口米次郎著
災禍の上に	一、五〇	、〇八	詩話會同人作
鷗	一、三〇	、〇八	國木田虎雄著
高麗の花（詩文集）	一、五〇	、〇八	室生犀星著
雨情民謠百篇	一、四〇	、〇八	野口雨情著
火星	二、〇〇	、一二	中山啓著
信仰の曙（修道院集）	一、八〇	、〇八	三木露風著

新潮社の詩集

散華樂	一、六〇	、一〇	三石勝五郎著
火山灰	一、五〇	、〇八	同
靈魂の秋	、八〇	、〇六	生田春月著
感傷の春	、八〇	、〇六	同
夢心地	、八〇	、〇六	同
春月小曲集	、八〇	、〇六	同
慰めの國	一、七〇	、〇八	同
佛蘭西詩選	一、八〇	、一〇	山内義雄譯
私への花環	、八〇	、〇六	生田春月譯
川路柳虹詩集	一、七〇	、一〇	川路柳虹著
百田宗治詩集	一、五〇	、一〇	百田宗治著
柳澤健詩集	一、七〇	、一〇	柳澤健著

近代舞踊詩劇・詩集

原始と文明の中間に怯える者

南江二郎氏著

・恩地孝四郎氏装・
・總洋布特装美本・
・定價壹圓七拾錢・
・郵送料拾錢・

詩壇の新人、南江二郎氏の舞踊詩劇と、詩とを集めて一巻となせるものである。舞踊詩劇は全く作者の創意に成るもので、古今東西の詩壇に類例を絶せる新様式である。闇を彩る毒の花の如き强き色彩と、媚藥の如く人を醉はしむる激しき芳香と、新らしき悪魔主義者としての作者の詩境は、まさに詩壇の驚異に値すべく、巻末の詩論、また傾聽すべきものが多い。詩を愛し、劇を愛する人々の一讀をおすゝめする。

小曲詩集 はつ戀

川路柳虹氏著

小型總布美本
價壹圓參拾錢
郵送料拾錢

詩集 自然の恵み

生田春月氏著

小型紙装
價八拾錢
郵送料六錢

純情小曲集

萩原朔太郎氏著

（近刊）